

根岸山添遺跡

— 県道八戸三沢線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2004年3月

青森県教育委員会

根岸山添遺跡

— 県道八戸三沢線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2004年3月

青森県教育委員会

序

八戸市根岸山添遺跡は、県道八戸三沢線道路建設工事に先立って、平成13・14年度に当センターが発掘調査を行いました。

この結果、縄文時代の遺構としては「落とし穴」が発見されました。落とし穴は細長い溝状をした形態の遺構で、けもの道に仕掛けて鹿などの獣を捕獲するための遺構です。この発見によって、この丘陵一帯が縄文時代には狩猟場として利用されていたことがわかりました。

また、古代の遺構としては方形の竪穴住居跡や円形の土坑（穴）が発見されました。奈良時代のものですが、この遺跡では数が非常に少ないことから、当時はまだこの丘陵一帯では、住居跡が集まった大きな集落跡はなく、住居跡が点在するような状況であったと考えられます。

この報告書は、2ヶ年にわたる調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の調査資料として、今後この地域の埋蔵文化財の調査・研究、文化財の活用等に役立ていただければ幸いです。

調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、種々ご指導・ご協力くださった関係各位に対して、厚くお礼を申し上げます。次第です。

平成16年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤良治

例 言

- 1 本報告書は、平成13・14年度に発掘調査された県道八戸三沢線道路建設事業に伴う、八戸市根岸山添遺跡の成果を収録したものである。
- 2 本報告書の執筆は、葛城和穂、浅田智晴、小田川哲彦が担当し、文末に氏名を記した。実測図等の作成は上記職員及び、調査補助員、整理作業員が行った。
- 3 本報告書に掲載した遺跡位置図は国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
- 4 基本層序及び土層の注記には、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1998（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
- 5 調査区内の基準点測量は、株式会社コサカ技研に委託した。
- 6 石器の石質鑑定は、八戸市文化財審議員の松山力氏に依頼した。
- 7 引用・参考文献については本文末に納めた。
- 8 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 9 遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
 - (1) 挿図中の北方位は、座標北である。
 - (2) 層位名は基本層位を「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…」などのローマ数字、遺構内堆積土層位を「1・2・3…」などの算用数字で表記している。
 - (3) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は、各表に記載した。
 - (4) 文章で一部略号を使用した火山灰は次のとおりである。

To-b：十和田b火山灰
B-Tm：白頭山ー苫小牧火山灰
 - (5) 図中で使用した着色表示は次のとおりである。

黒：黒色処理 赤：赤色顔料による赤彩
 - (6) 遺物分布図で使用した記号は、以下のとおりである。

●土器 ▲礫・石器
 - (7) 挿図中で使用したスクリーントーンについては、各図ごとに凡例を付した。
 - (8) 挿図の縮尺率とスケールは各図中に示した。
 - (9) 遺物写真図版の縮尺は原則として1/3、1/2、2/3とした。
- 10 発掘調査及び本報告書作成にあたって下記の諸氏から御協力・御助言を得た。銘記して感謝申し上げる（敬称略）。

宇部則保、大野亨、工藤忍、最上法聖

目 次

序

例言

目次

挿図目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査にいたるまでの経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査方法	2
第4節 調査の経過	3
第2章 遺跡周辺の環境	4
第1節 遺跡周辺の地理的環境	4
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	4
第3節 基本層序	7
第3章 検出遺構と出土遺物	11
第1節 平成13年度調査区検出遺構	11
第2節 平成14年度調査区検出遺構	16
第3節 文化財保護課調査区検出遺構	21
第4節 出土遺物	22
第4章 まとめ	30
引用・参考文献	31
観察表	32
写真図版	35
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

図 1	遺跡位置図	5
図 2	地形及び路線図	6
図 3	平成 14 年度調査区基本層序	7
図 4	調査区位置図	9・10
図 5	平成 13 年度調査区遺構配置図	12
図 6	第 1 号竪穴住居跡・第 1 号土器埋設遺構・第 1 号土坑	13
図 7	第 1・2 号溝状土坑	14
図 8	第 3・4 号溝状土坑	15
図 9	平成 14 年度調査区遺構配置図	16
図 10	第 2・3・4・5・6・7・8 号土坑	17
図 11	第 5 号溝状土坑	19
図 12	第 1 号溝跡	20
図 13	文化財保護課調査区遺構配置図	21
図 14	第 2 号溝跡・第 6 号溝状土坑	22
図 15	遺構内出土縄文土器	23
図 16	遺構外出土縄文土器	24
図 17	弥生土器	25
図 18	奈良時代土師器	26
図 19	縄文時代石器	28
図 20	奈良時代土製品	28
図 21	近世以降の遺物	29

第1章 調査概要

第1節 調査にいたるまでの経過

東北縦貫自動車道八戸線の延伸に伴う道路整備事業の一環として、県道八戸三沢線の道路建設事業が計画され、予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いをめぐって、県土木部道路建設課（現・県土整備部道路課）と県教育庁文化課（現・文化財保護課）間で協議が行われた。このうち、平成12年9月29日に、同文化課（現・文化財保護課）・八戸土木事務所（現・八戸県土整備事務所）・当センターの三者で現地踏査を行った結果、道路予定地内に伸びてきている当遺跡の発掘調査が必要と判断され、当センター宛に調査の実施依頼があった。これを受けて当センターでは、翌平成13年3月13日に、日本道路公団八戸工事事務所・八戸土木事務所職員とともに最終的な現地確認踏査を行い、翌4月19日から6月29日まで当遺跡を調査することとなった。

この後、平成13年10月3日には、この調査区と県道八戸三沢線を挟んで反対側に建設が予定されている貯水池部分について、文化財保護課と当センター職員が現地踏査し、さらに平成14年3月6日には八戸土木事務所職員とともに最終的な現地確認を行った。その結果、翌4月16日から5月24日まで当センターが調査を実施することになった。また、文化財保護課では、平成13年12月12日～18日に、貯水池部分に隣接する区域（200㎡）の発掘調査を緊急に行ない、縄文時代の溝状土坑等を発見している。このため、当報告にはこの調査結果も含めて掲載した。

なお、当遺跡については、日本道路公団による東北縦貫自動車道八戸線延伸の建設工事に先立って、八戸市教育委員会が平成9年8月7日～28日に約1,300㎡を調査し、縄文・弥生時代の遺物及び奈良時代の竪穴住居跡2軒等を発見している（八戸市教委1999）。

第2節 調査要項

1 調査目的

県道八戸三沢線道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する根岸山添遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

- 2 発掘調査期間 （平成13年度）4月19日から同年6月29日まで
（平成14年度）4月16日から同年5月24日まで

- 3 遺跡名及び 根岸山添遺跡（青森県遺跡番号03203）
所在地 （平成13年度）八戸市大字尻内町字熊ノ沢20-6ほか
（平成14年度）八戸市大字尻内町字根岸山添13-3

- 4 調査面積 （平成13年度）2,400㎡
（平成14年度）1,000㎡

- 5 調査委託者 青森県県土整備部道路課
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

(平成 13 年度)

調査指導員	村越 潔	青森大学社会学部教授 (考古学)
調査員	七崎 修	元青森県立八戸北高等学校教諭 (地質学)
調査員	工藤 竹久	八戸市教育委員会文化課副参事 (考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所 長	中島 邦夫 (現青森県立郷土館長)
	次 長	成田 誠治 (平成 14 年 3 月退職)
	総務課長	西口 良一 (現青森県労政・能力開発課総括主幹)
	調査第二課長	福田 友之 (現次長)
	文化財保護主事	中村 哲也・葛城 和穂
	調査補助員	秋田谷 恵美・神 健太郎
	〃	工藤 百恵・泉山 弥生

(平成 14 年度)

調査指導員	村越 潔	青森大学社会学部教授 (考古学)
調査員	七崎 修	元青森県立八戸北高等学校教諭 (地質学)
調査員	小林 和彦	八戸市縄文学習館副参事 (考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所 長	佐藤 良治
	次 長 (調査第一課長兼務)	福田 友之
	総務課長	工藤 和夫
	文化財保護主事	浅田 智晴・葛城 和穂
	調査補助員	小野 亜沙美・中野 透

(福田)

第 3 節 調査方法

調査はグリッド法を基本とした。グリッド杭は、基準点測量委託により設置した 4 級測量基準点を用いて打設した。グリッド原点の座標値は、平面直角座標第 X 系の $X = 57,700$ 、 $Y = 49,500$ である。

グリッドは 4×4 m を基準とし、北方向に向かって、ローマ数字とアルファベット A から Y まで 25 文字の組み合わせで、I A、I B…と呼称し、西から東に向かって 2 桁の算用数字を付した。標

高値は、同じく委託により設置したベンチマークから移設して用いた。

表土の除去及び移動は基本的に人力で行ったが、一部重機を使用した。

遺構は種別毎・検出順に名称を付したが、一部整理時に遺構名の振替を行ったものもある。遺構の精査には各遺構の規模・形状に合わせて、四分法と二分法を適宜採用し分層発掘に努めた。実測図は縮尺1/20を基本としたが、遺構・遺物の検出状況によって適宜変更し作成した。層序については、遺構内堆積土は算用数字、基本層序はローマ数字で表記した。

写真撮影は、35mmカメラを主体とし、カラーリバーサルフィルム・モノクロフィルム・カラーネガフィルムを用いて撮影した。

第4節 調査の経過

(平成13年度)

4月19日より機材を搬入し調査を開始した。調査区内の環境整備後粗掘を開始し、同時にグリッド杭の設置及びベンチマークの移動を行った。排土置き場の関係から、調査区を東西に二分割し、西側から調査を開始した。この調査区からは縄文時代と考えられる落とし穴や奈良時代の竪穴住居跡などが検出された。6月に入ると調査区東側の表土を重機で除去した。こちらは県道建設時に大規模な攪乱を受けており、調査区の大半が基本層序を欠如していたため、表土除去後すぐに遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代のものと考えられる溝状土坑が3基検出された。これらの遺構の精査を終了後、6月29日には機材の撤収を完了し、全ての調査を終了した。

(平成14年度)

4月16日より機材を搬入し調査を開始した。当初、前年度の調査結果から、東西に延びる尾根上に広がる平坦面に奈良時代の集落が広がるものと予想していた。しかしトレンチ調査の結果、馬の背状の尾根を大規模に削平して耕作地を造成していることが明らかとなった。このため調査区の北東部から南東部にかけての一部を除き遺構が存在しないことが明らかとなった。そこで当初の予定を早め、調査終了の期日を5月24日とし、それまでに検出された遺構の精査を中心に調査を進めた。その後、谷部の黒色土の掘り下げ及び遺構の確認を行ったが、遺構・遺物はほとんど検出されなかった。このため予定通り5月24日に機材の撤収を完了し、全ての調査を終了した。

(葛城)

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡周辺の地理的環境

根岸山添遺跡は八戸市の中心から西へ約6 km、標高50 m前後の高館段丘上に位置する。南側を馬淵川の支流、浅水川が東に向かって流れ、その沖積地に面した丘陵縁辺部分は急崖が連なる。丘陵北側には段丘を大きく開析する熊ノ沢の支流が東西に延びている。遺跡はそれらに挟まれた、東西に延びる丘陵頂部を中心に広がりを見せる。各調査区は県道八戸三沢線を挟んで南北両側に広がり、平成14年度調査区は道路南側の丘陵頂部付近、平成13年度調査区は熊ノ沢に向かって傾斜する斜面地となっている。平成13年度調査区の調査以前の土地利用状況は山林、平成14年度調査区は畑であった。平成14年度調査区は本来緩やかな傾斜を持つ丘陵頂部が存在したと思われるが、近年の畑開墾の際に平坦に削平されていた。また、文化財保護課の調査区は県道八戸三沢線が付け替えられた旧道部分で、平成13年度、平成14年度調査区のほぼ中間地点にあたる。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

当遺跡の周辺では、近年特に平安時代に関して注目される遺跡が多く調査されている。当遺跡と同一丘陵上に位置する林ノ前遺跡は、八戸市教育委員会と県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われており、平安時代後半を中心とした遺構が多数検出されている。丘陵頂部には少なくとも二重の堀跡が検出された。林ノ前遺跡から西へ約4 km離れた上七崎遺跡で検出された3本の堀跡と同様、堀によって区画された集落が浅水川流域に点在することが確認された。また、痩せた尾根と急斜面の谷が熊ノ沢に向かって交互に連なる北東斜面には、等高線に沿って計画的に構築された竪穴住居跡と大型の土坑が密集して複雑に重複しており、鍛冶炉と思われる鉄生産関連遺構も検出された。多量の鉄製品や銅製品、^{るっぼ}埴埴、銅塊が出土していることから、銅製品の生産も行っていた可能性がある。またウマを中心とした獣骨や、炭化種子や魚骨、貝が多量に出土したことから、当時の生業が想定される。特筆されるのは、人骨がこれまでに少なくとも10体分出土していることである。大半の人骨が頭蓋骨のみであり、遺構の埋没過程の窪地に投げ込まれたような出土状況など、非常に特異な集落跡であると言える。また浅水川を挟んで、沖積平野に舌状に張り出した丘陵端部に大仏遺跡が立地している。八戸市教育委員会によって調査が行われ、平安時代後半から中世にかけて存続しており、特に平安時代後半の出土遺構・遺物は当地域では林ノ前遺跡同様、検出数が少ない遺跡である。

また、当遺跡周辺で検出された奈良時代の遺跡は、浅水川の対岸に位置する夏間木(1)遺跡で竪穴住居跡が2軒、当遺跡から北東に約1.7 kmの毛合清水(1)遺跡で竪穴住居跡1軒、隣接する毛合清水(3)遺跡で竪穴住居跡1軒、西に2.5 kmの境沢頭遺跡で竪穴住居跡1軒と、大規模な集落展開を示す調査事例は未だ無い。また、毛合清水(3)遺跡では円形周溝が検出されているが、いずれも検出数は少ない。

(浅田)

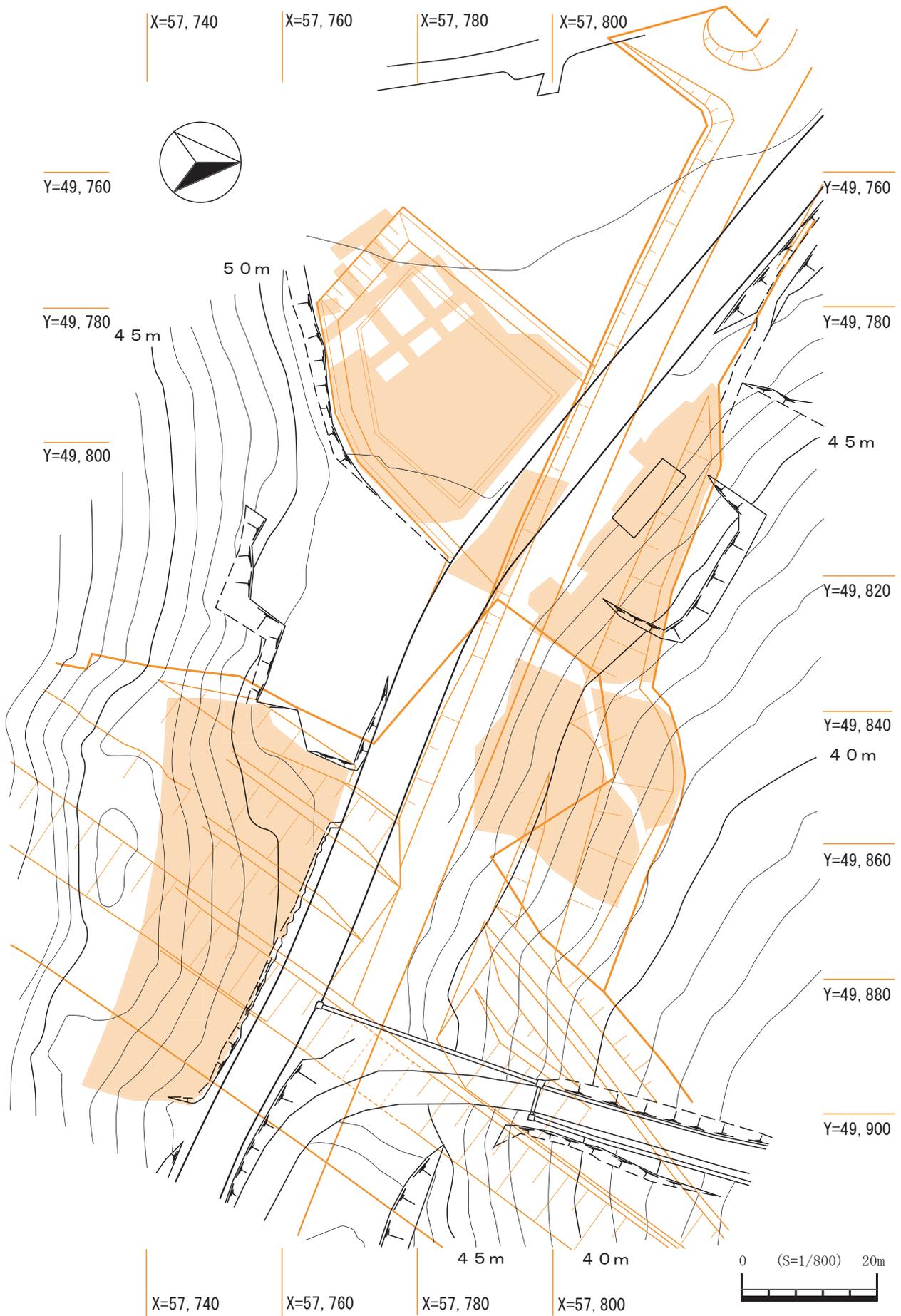
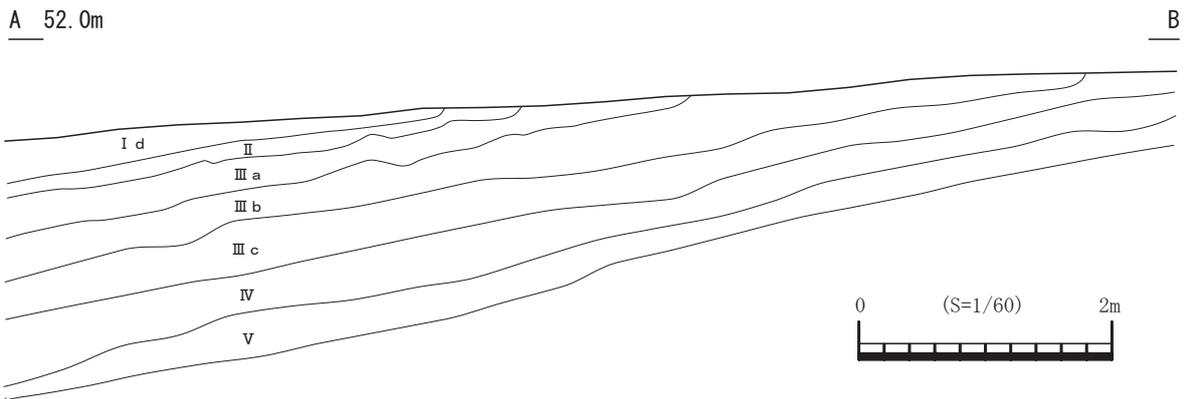


図2 地形及び路線図

第3節 基本層序

今回報告する根岸山添遺跡は、平成13・14年度の2ヶ年にわたって調査が行われた。そのため、それぞれの調査ごとに土層観察用のベルトを設定し、土層の把握に努めた。この結果、調査ごとに異なる層番号が付されたため、整理作業時に層番号の整理統合を行った。以下、各土層について述べる。

盛土		層中にビニールなどを含む現代の盛土である。県道敷設時のものと耕地の整備に伴うものがある。
第I a層	10YR2/3 黒褐色土	十和田b降下軽石を含むが、第I b層のものより径が小さい小礫を含み堅緻である。
第I b層	10YR2/2 黒褐色土	十和田b降下軽石を多量に含む。第I a層と同様に堅緻である。
第I c層	10YR2/2 黒褐色土	十和田b降下軽石を若干含む。砂粒は多量に含まれる。
第I d層	10YR2/2 黒褐色土	十和田b降下軽石を若干含む。第I c層に比べ砂粒の混入がなく、色調も暗い。第I層の中では最もしまりがなく、小礫の混入も少ない。
第II層	10YR2/1 黒色砂質土	十和田b降下軽石初現の層。非常に堅緻である。
第III a層	10YR2/3 黒褐色砂質土	中礫 ^{ちゅうりぼり} 浮石を母材とする。堆積状況の良好な場所では浮石の混入量の多く色調の明るいIII a-1と、暗いIII a-2に分層される。
第III b層	10YR2/2 黒褐色砂質土	中礫浮石を母材とする。φ~10mmの浮石の混入が目立つ。第III層中で最も暗く、粘性に富む。
第III c層	10YR2/3 黒褐色砂質土	中礫浮石を母材とする。土質は第III a層に類似するが、色調



第I d層	黒褐色砂質土	10YR2/2	十和田b火山灰、小礫含む。
第II層	黒色砂質土	10YR2/1	十和田b火山灰、小礫微量。堅緻。
第III a層	黒褐色砂質土	10YR2/3	中礫浮石母材。小礫微量。
第III b層	黒褐色砂質土	10YR2/2	中礫浮石母材。第III層中で最も粘性に富む。
第III c層	黒褐色砂質土	10YR2/3	中礫浮石母材。第III層中で最も砂質に富む。
第IV層	黒褐色砂質土	10YR2/2	南部浮石と考えられる浮石粒(φ~10mm)5%。上層に比べ粘性に富み堅緻。
第V層	暗褐色砂質土	10YR3/3	土質は第IV層に類似し、漸移的な変化を示す。

図3 平成14年度調査区基本層序

は若干明るく砂質に富む。

- 第Ⅳ層 10YR2/2 黒褐色砂質土 南部浮石と考えられるφ～10mmの浮石粒を含む。
第Ⅴ層 10YR3/3 暗褐色砂質土 土質は第Ⅳ層に類似する。漸移層。
第Ⅵ層 八戸火山灰最上部と考えられる黄褐色火山灰土。

上記の各土層は、谷部において良好な堆積を見せるが、平成13年度調査区東側及び西側の斜面上方、そして平成14年度調査区の大半は、県道敷設及び耕地造成時に大規模な削平を受けており、欠如している土層もある。

なお、平成13年度調査区及び文化財保護課調査区の基本層序図は、第3章の遺構図面と併せて提示しているので、そちらを参照されたい。

(葛城)

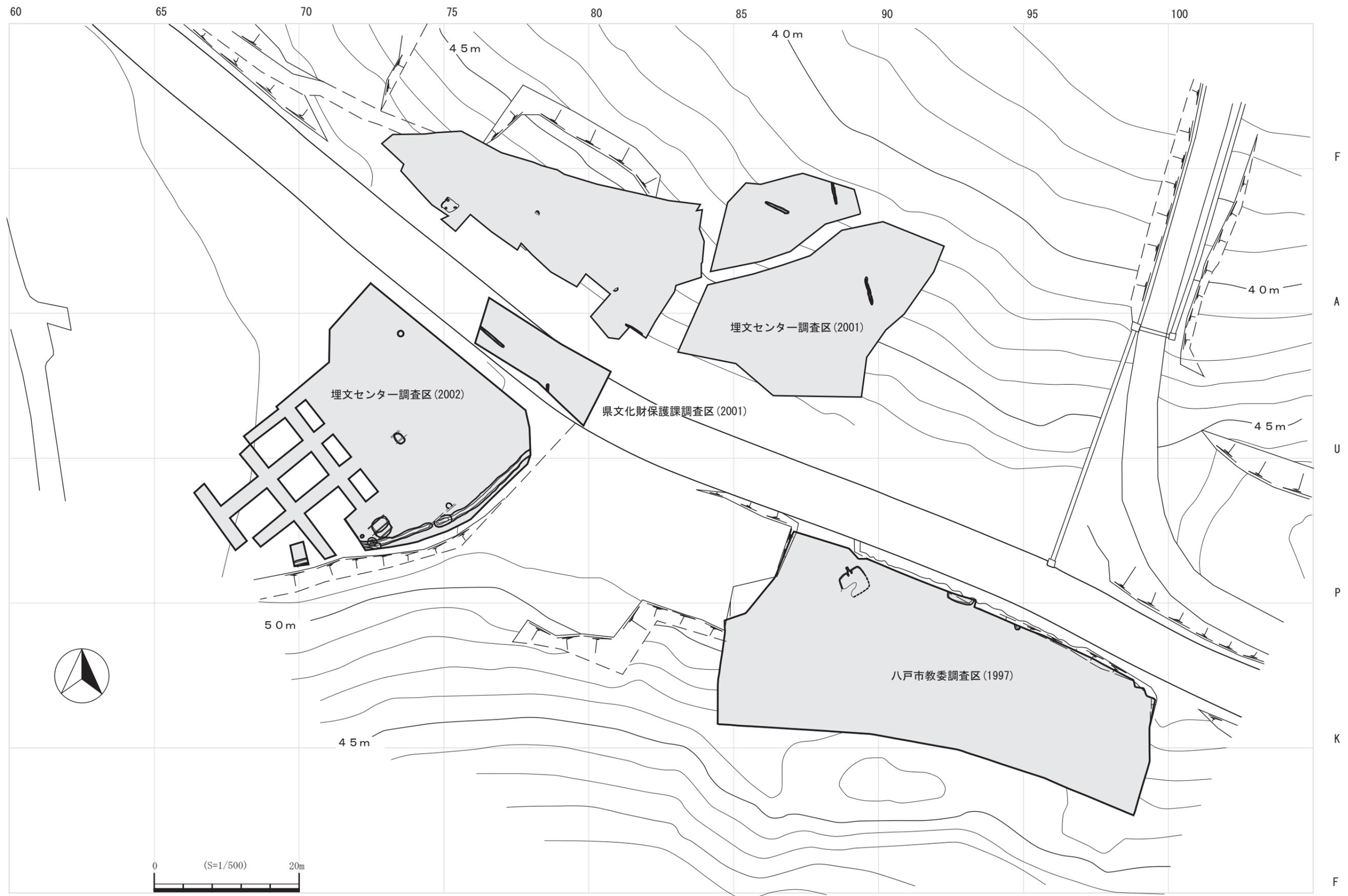


図4 調査区位置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 平成13年度調査区検出遺構

平成13年度は約2,400㎡を調査した。調査区西側の斜面上方は一部県道建設に伴う攪乱を受けていたが、奈良時代の竪穴住居跡が1軒検出されている。この斜面下方からは、縄文時代後期初頭の土器埋設遺構が1基検出されている。またその東側にある、平成14年度調査区から続く谷地形を挟んだ調査区の東側からは、縄文時代のもと考えられる溝状土坑が斜面下方を中心に4基検出されている。他に谷部からは奈良時代のもと考えられる土坑が1基検出されている（図5）。以下にその概要を述べる。

第1号竪穴住居跡〔SI01〕（図6）

今回の調査で検出された竪穴住居跡は1棟である。後世の攪乱によって遺構の大半が失われているが、柱穴及び貼床の存在から住居跡とした。

〔位置〕ⅡD-74・75グリッドに位置する。

〔形態・規模〕風倒木及び後世の攪乱によって大半が失われており、北西側の壁と貼り床の一部のみの検出である。残存する壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。壁高は約18cmである。貼り床は褐色シルトを主体とし、堅くしまっている。残存範囲は1m93cm×1m60cmである。掘り方底面には凹凸がみられる。

〔柱穴〕3基検出した。平面形は円形及び楕円形で、深さはそれぞれPit 1…8cm、Pit 2…13cm、Pit 3…8cmである。

〔堆積土〕黒色シルトを主体としている。基本層序第Ⅱ層に類似するが、To-b及び中礫浮石起源と考えられる黄褐色の微細粒子の含有量が少ない。

〔出土遺物〕覆土から土師器甕底部が出土している。

〔時期〕出土遺物から8世紀前半と考えられる。

第1号埋設土器〔SR01〕（図6）

〔位置と確認〕ⅡD-78グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に、倒立した状態からやや傾いた状態で検出された。

〔堆積土〕黒褐色砂質シルトを主体としている。層中に中礫浮石起源と考えられる黄褐色の微細粒子を含み、全体的に基本層序第Ⅲa層に類似するが、その含有量は第Ⅲa層より少なく粘性も若干強い。しかし、掘り方との明確な分層はできなかった。

〔時期〕土器の時期から、縄文時代後期初頭と考えられる。

第1号土坑〔SK01〕（図6）

調査時点では第2号竪穴住居跡〔SI02〕として調査を行ったが、検討の結果、土坑に名称

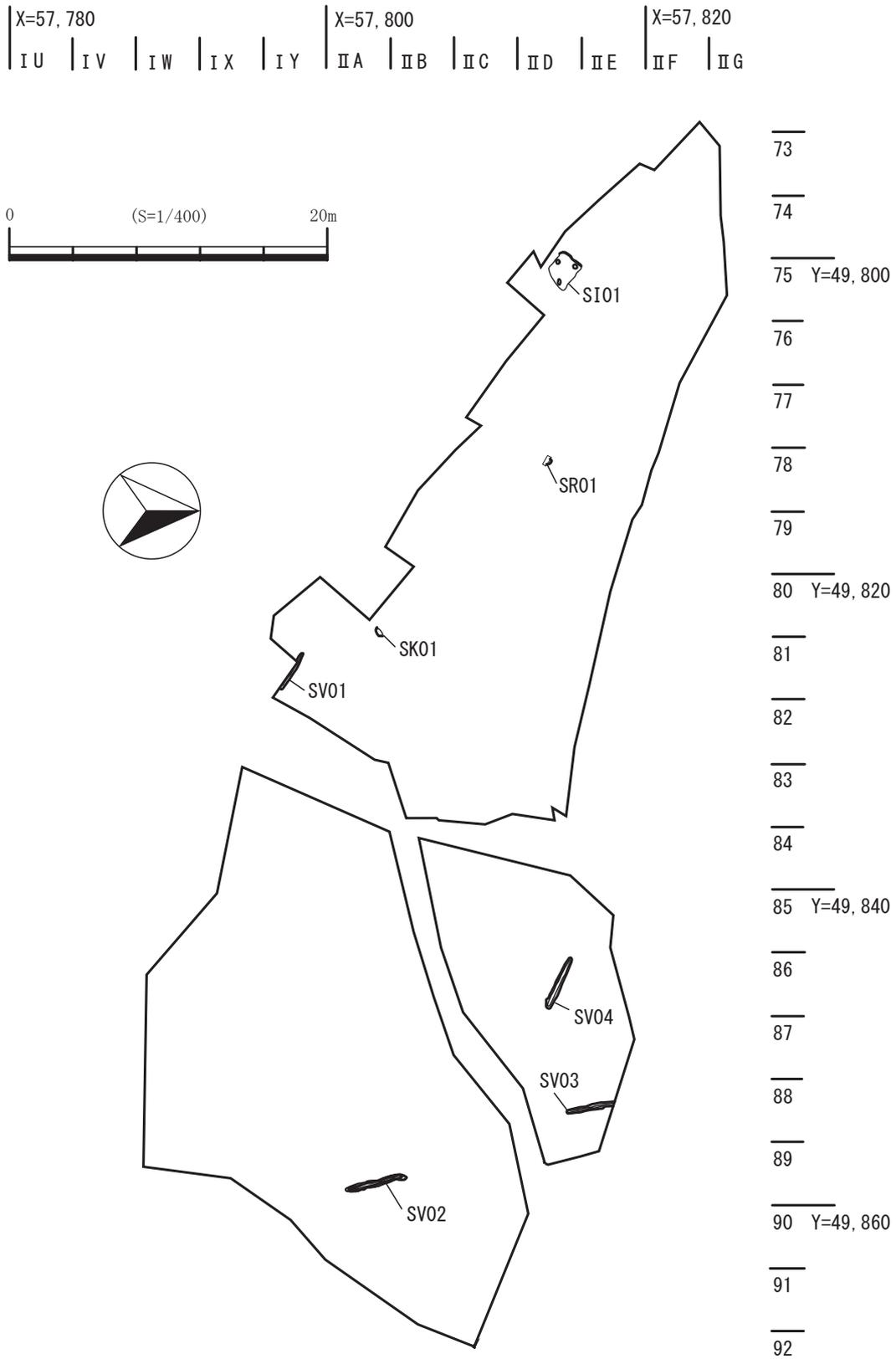


图5 平成13年度調査区遺構配置図

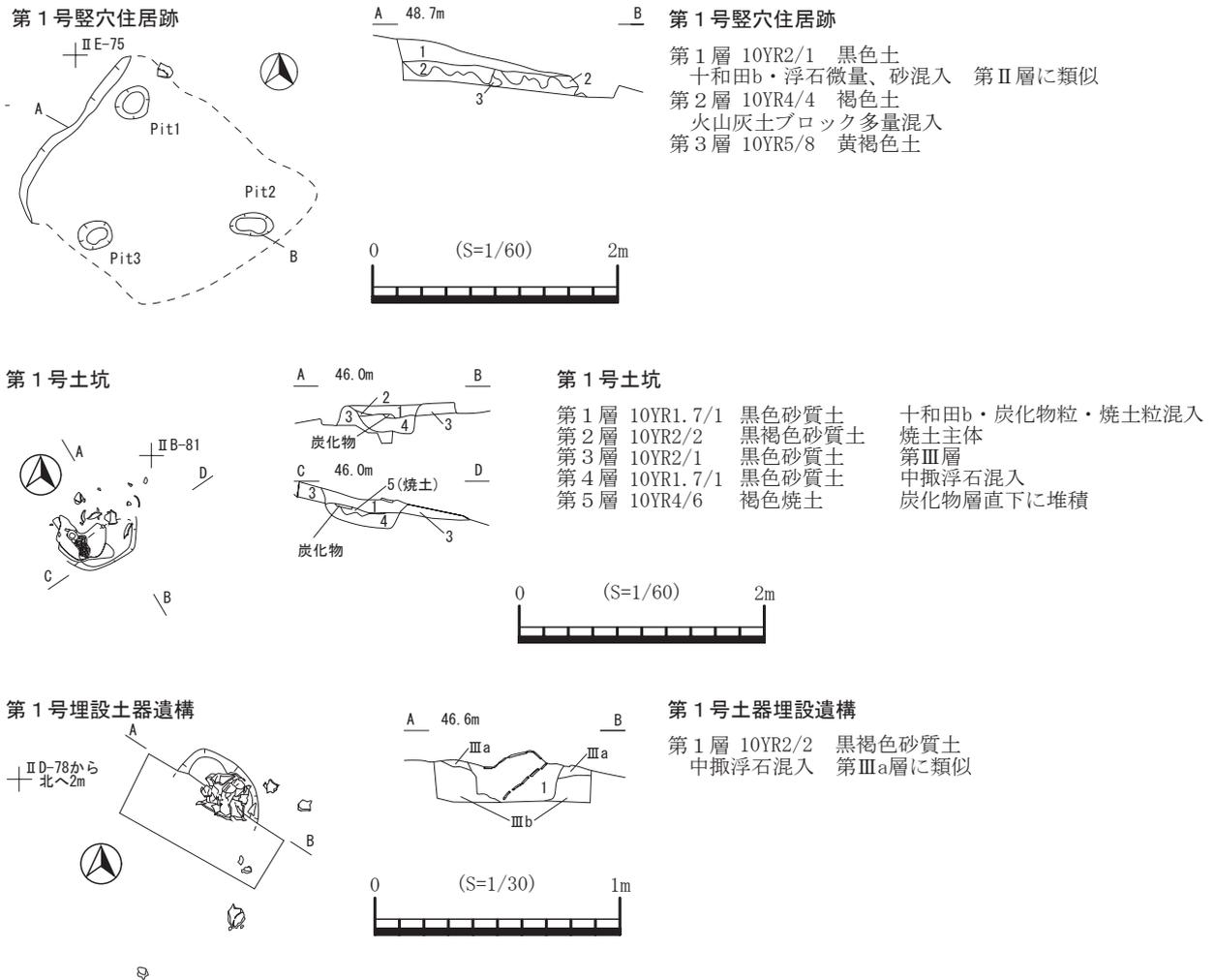


図6 第1号竪穴住居跡・第1号土器埋設遺構・第1号土坑

を振り替え、第1号土坑〔SK01〕とした。

〔位置〕II A-80 グリッドに位置する。

〔形態・規模〕北側を掘りすぎたため平面形は不明である。土層図から推定される規模は長軸73cm、短軸63cm、深さ24cmである。

〔堆積土〕5層に分層した。黒色砂質シルトを主体とし、層中に焼土層及び炭化物層を含む。

〔出土遺物〕土師器坏、甕が出土しているが、全て1層から出土している。廃絶後の埋没過程において流入したものと思われる。

〔時期〕出土遺物から8世紀前半を中心とした時期の可能性はある。

第1号溝状土坑〔SV01〕(図7)

〔位置〕II A-80 グリッドに位置する。

〔規模〕長軸2m 65cm、短軸24cm、深さ1m 22cmである。

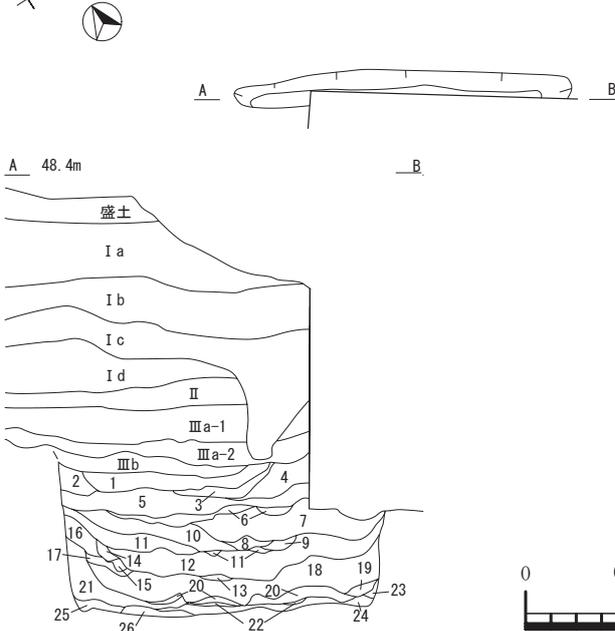
〔堆積土〕26層に分層した。基本層序第III b層中を掘り込んで構築されている。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕遺構の検出状況及び形態から縄文時代のものと考えられる。

第1号溝状土坑

II A-81

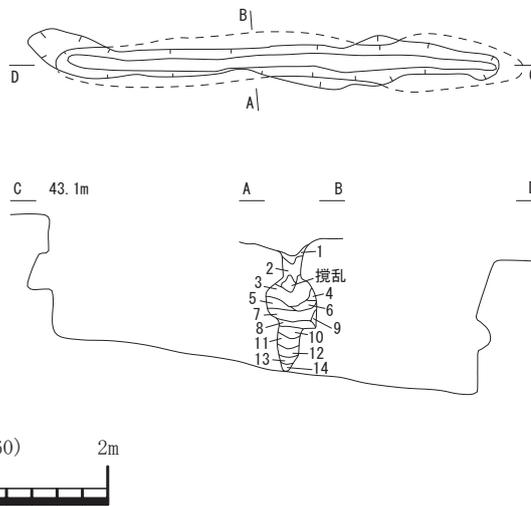


第1号溝状土坑

第1層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中礫浮石母材の層、第Ⅲ層に類似
第2層	10YR2/1	黒色砂質土	中礫浮石微量混入
第3層	10YR2/1	黒色砂質土	第2層とほぼ同質
第4層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中礫浮石母材の層
第5層	10YR1.7/1	黒色砂質土	中礫浮石微量混入
第6層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中礫浮石母材の層
第7層	10YR2/1	黒色砂質土	
第8層	10YR2/2	黒褐色砂質土	粒径の大きい砂を主体とした層
第9層	10YR2/1	黒色砂質土	第7層とほぼ同質
第10層	10YR1.7/1	黒色砂質土	
第11層	10YR2/1	黒褐色砂質土	砂混入
第12層	10YR2/1	黒色砂質土	
第13層	10YR3/1	黒褐色砂質土	10YR3/4暗褐色粘土混入
第14層	10YR2/1	黒色砂質土	
第15層	10YR1.7/1	黒色砂質土	
第16層	10YR2/1	黒色砂質土	
第17層	10YR2/1	黒色砂質土	砂混入
第18層	10YR2/1	黒色砂質土	
第19層	10YR1.7/1	黒色砂質土	
第20層	10YR2/3	黒褐色砂質土	10YR3/4暗褐色粘土混入
第21層	10YR2/1	黒色砂質土	
第22層	10YR1.7/1	黒色砂質土	泥炭質
第23層	10YR2/3	黒褐色砂質土	暗褐色ローム主体、崩落土
第24層	10YR2/1	黒色砂質土	
第25層	10YR2/3	黒褐色砂質土	
第26層	10YR2/2	黒褐色砂質土	10YR3/3暗褐色土との混合土、

II B-90

第2号溝状土坑



第2号溝状土坑

第1層	黄褐色土	10YR5/6	
	黒色土との混合土		盛土
第2層	黒褐色砂質土	10YR2/2	
	中礫浮石多量、ローム混入		崩落土
第3層	黒色砂質土	10YR2/1	
	中礫浮石少量混入		中礫浮石母材の層
第4層	黒色砂質土	10YR2/1	
第5層	黒褐色砂質土	10YR2/2	
第6層	黒褐色砂質土	10YR3/1	浮石多量混入
第7層	黒色砂質土	10YR2/1	
	中礫浮石母材の層		
第8層	黒褐色砂質土	10YR2/2	
第9層	明黄褐色土	10YR7/6	ローム主体、崩落土
第10層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム主体、崩落土
第11層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム主体、崩落土
第12層	黄橙色土	10YR7/8	ローム主体、崩落土
第13層	黄橙色土	10YR8/6	ローム主体、崩落土
第14層	暗褐色砂質土	10YR3/4	

図7 第1・2号溝状土坑

第2号溝状土坑〔SV02〕(図7)

〔位置〕 II A-91 グリッドに位置する。

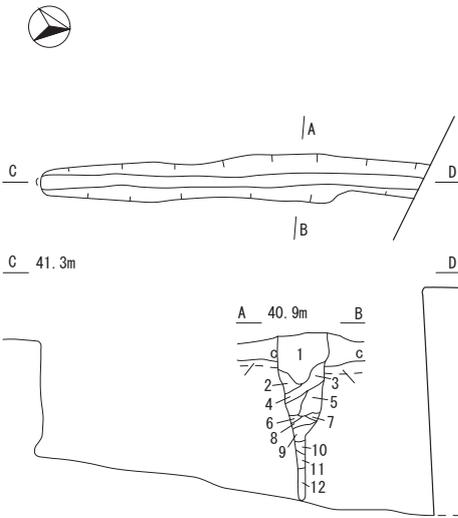
〔規模〕 長軸 3 m 74cm、短軸 39cm、深さ 1 m 1 cm である。

〔堆積土〕 14層に分層した。第1層は現代の盛り土である。第9～13層は壁面の崩落土であり、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 遺構の形態から縄文時代のものと考えられる。

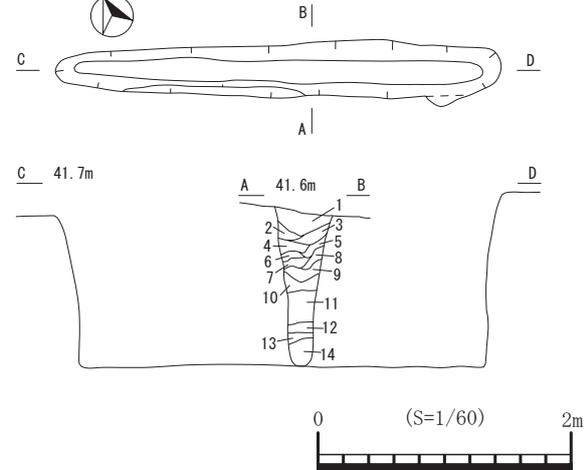
第3号溝状土坑 E-88



第3号溝状土坑

第1層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層
第2層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中掇浮石母材の層
第3層	10YR3/1	黒褐色砂質土	中掇浮石母材の層
第4層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石混入
第5層	10YR2/1	黒色砂質土	浮石混入
第6層	10YR2/3	黒褐色砂質土	崩落土
第7層	10YR2/3	黒褐色砂質土	
第8層	10YR2/1	黒色砂質土	
第9層	10YR2/2	黒褐色砂質土	
第10層	10YR3/4	暗褐色砂質土	崩落土
第11層	10YR3/2	黒褐色砂質土	土質は第10層に類似
第12層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層

第4号溝状土坑 E-86



第4号溝状土坑

第1層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層
第2層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中掇浮石母材の層
第3層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中掇浮石母材の層
第4層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層
第5層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層
第6層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中掇浮石母材の層
第7層	10YR3/1	黒褐色砂質土	浮石粒混入 中掇浮石母材の層
第8層	10YR2/2	黒褐色砂質土	中掇浮石母材の層
第9層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層
第10層	10YR2/3	黒褐色砂質土	浮石粒混入 中掇浮石母材の層
第11層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層、土質は第9層に類似
第12層	10YR2/3	黒褐色砂質土	粘土粒混入 中掇浮石母材の層
第13層	10YR2/2	黒褐色砂質土	10YR3/3暗褐色土ブロック混入 中掇浮石母材の層、崩落土
第14層	10YR2/1	黒色砂質土	中掇浮石母材の層

図8 第3・4号溝状土坑

第3号溝状土坑〔SV03〕(図8)

〔位置〕ⅡD・E-88グリッドに位置する。

〔規模〕北側が調査区域外に延びるが、確認できた長軸は2m98cm、短軸37cm、深さ1m31cmである。

〔堆積土〕12層に分層した。黒色及び黒褐色の砂質土を主体とする。中掇浮石を母材とするものも多く、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕遺構の形態から縄文時代のものと考えられる。

第4号溝状土坑〔SV04〕(図8)

〔位置〕ⅡD-86グリッドに位置する。

〔規模〕長軸3m49cm、短軸44cm、深さ1m27cmである。

〔堆積土〕14層に分層した。全てが中掇浮石を母材とする砂質土であり、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕遺構の形態から縄文時代のものと考えられる。

第2節 平成14年度調査区検出遺構

平成14年度は約1,000㎡を調査した。当初、尾根頂部に位置する平坦面の調査であったため、奈良時代の集落跡が展開しているのではないかと考えた。しかし調査の結果、この平坦面は現代の耕作地造成の際に大規模な削平を受けた結果であることが判明した。

検出された遺構も斜面部からの検出がほとんどであり、平坦面から遺構は検出されなかった。検出遺構は、縄文時代のもと考えられる溝状土坑が1基、時期の特定できない土坑が6基、井戸跡1基、溝跡が1条である。

第2号土坑〔SK02〕（図10）

〔位置〕IU-73グリッドに位置する。

〔形態・規模〕長軸約1m65cm、短軸1m12cmの楕円形を呈する。深さは24cmである。

〔堆積土〕2層に分層した。

〔出土遺物〕堆積土中から土師器及び石器が出土している。

第3号土坑〔SK03〕（図10）

〔位置〕IS-75グリッドに位置する。

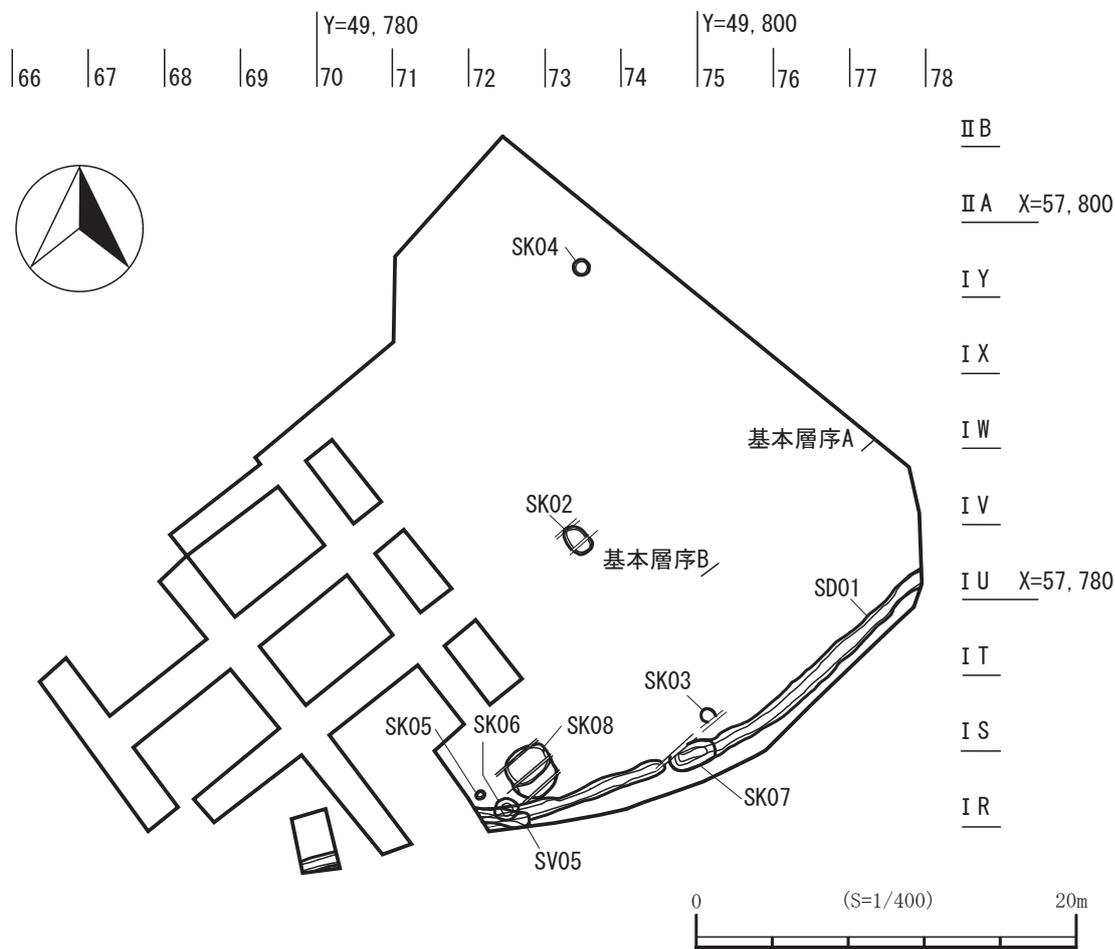
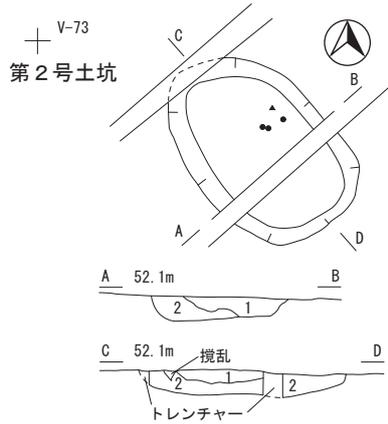


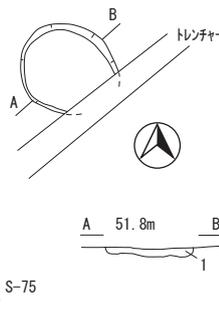
図9 平成14年度調査区遺構配置図



第2号土坑

第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物を主体とする10YR2/1黒色土との混合土、
 ローム粒・炭化物粒・焼土粒微量、火山灰混入
 第2層 10YR4/4 褐色土 ローム粒・炭化物粒微量、火山灰混入

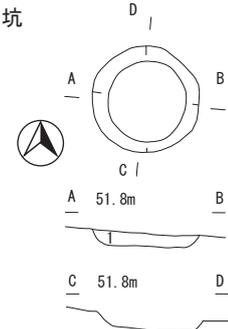
第3号土坑



第3号土坑

第1層 10YR2/1 黒色土
 ローム粒・炭化物粒微量混入
 堅緻

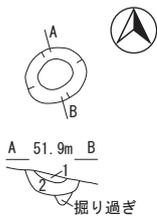
第4号土坑



第4号土坑

第1層 10YR2/2 黒褐色土
 炭化物粒・中掬浮石微量混入

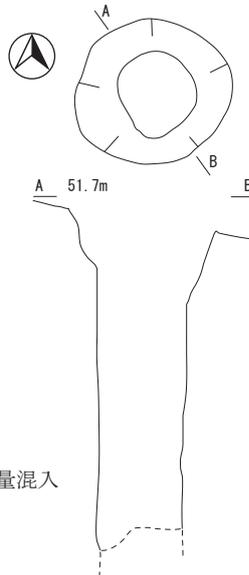
第5号土坑



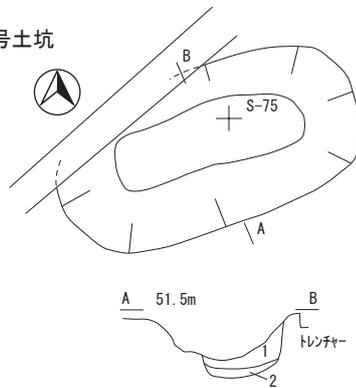
第5号土坑

第1層 10YR2/3 黒褐色砂質土
 炭化物粒微量混入
 第2層 10YR3/2 黒褐色砂質土
 ローム粒・炭化物粒微量混入

第6号土坑



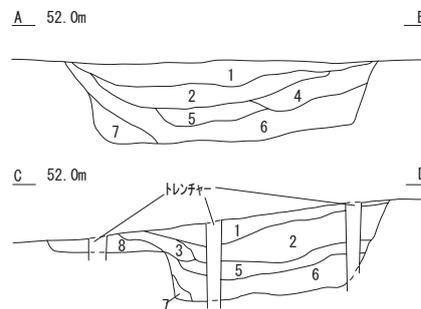
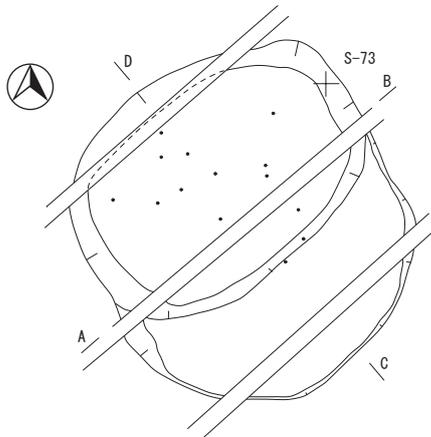
第7号土坑



第7号土坑

第1層 10YR2/1 黒色土 ロームブロックとの混合土
 第2層 10YR7/6 明黄褐色土 ロームブロックとの混合土

第8号土坑



第8号土坑

第1層 10YR2/1 黒色砂質土 ローム粒少量、小礫微量混入
 第2層 10YR3/4 暗褐色砂質土 ローム粒多量、小礫少量混入
 第3層 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 ローム粒・炭化物粒微量混入
 第4層 10YR3/3 暗褐色砂質土 ローム粒少量、炭化物粒微量混入
 第5層 10YR3/2 黒褐色砂質土 ローム粒・炭化物粒微量混入
 第6層 10YR4/6 褐色砂質土 ローム粒少量混入
 第7層 10YR4/4 褐色砂質土 ローム粒・炭化物粒微量混入
 第8層 10YR2/3 黒褐色砂質土 ローム粒・炭化物粒・小礫微量混入

図10 第2・3・4・5・6・7・8号土坑

[形態・規模] 直径 74 cm の円形を呈する。深さは 7 cm である。

[堆積土] 黒色土を主体とする。層中にローム粒及び炭化物を含むことから、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第 4 号土坑〔SK04〕(図 10)

[位置] I Y - 73 グリッドに位置する。第 III b 層を精査中に黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 直径 84 cm の円形を呈する。深さは 16 cm である。

[堆積土] 黒色土を主体とし、層中には炭化物を含む。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 本遺構の確認面は第 III b 層であるが、直上には現代の盛土が堆積しており時期を特定することはできなかった。

第 5 号土坑〔SK05〕(図 10)

[位置] I R - 72 グリッドに位置する。

[形態・規模] 長軸 48 cm、短軸 40 cm のほぼ円形を呈する。深さは 20 cm である。

[堆積土] 2 層に分層した。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第 6 号土坑〔SK06〕(図 10)

土坑としたが、形態から井戸跡の可能性が考えられる。確認面は現代の盛土で覆われていたが、その直下は埋没しきっていなかった。そこで崩落の危険性を考慮し、断面図の作成及び底面の検出を断念したため、本遺構の詳細は不明である。しかし、埋没しきっていないことや、出土遺物から近代以降のものと考えられる。

[位置] I R - 72 グリッドに位置する。第 1 号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模] 長軸 1 m 26 cm、短軸 1 m 15 cm のほぼ円形を呈する。崩落の危険性を考慮し、底面は検出しなかった。確認できた深さは 2 m 72 cm である。

[堆積土] 開口部は盛土で覆われていたが、その直下は一部空洞となっていたため、断面図は作成できなかった。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器・土師器及び茶碗片が出土している。

[時期] 出土遺物から近代以降のものと考えられるが、詳細は不明である。

第 7 号土坑〔SK07〕(図 10)

[位置] I R - 74 グリッドに位置する。

[重複] 第 1 号溝跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模] 長軸 2 m 45 cm、短軸 1 m 30 cm の楕円形を呈する。深さは 71 cm である。

[堆積土] 2 層に分層した。いずれもロームブロックとの混合土であり、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第8号土坑〔SK08〕(図10)

〔位置〕 I R - 72 グリッドに位置する。

〔形態・規模〕 長軸 2 m 70 cm、短軸 1 m 75 cm、深さ 65 cmの楕円形を呈する。また、南東部にテラス状の張り出しを検出した。別遺構との重複の可能性も考えられる。深さは約 13 cmである。

〔堆積土〕 8層に分層した。自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器及び土師器が出土している。

第5号溝状土坑〔SV05〕(図11)

〔位置〕 I R - 72 グリッドに位置する。

〔重複〕 第1号溝跡と重複し、本遺構が古い。

〔規模〕 西側が調査区域外に延びるため全体形は不明であるが、確認できた長軸は 2 m 84cm、短軸 84cm、深さ 1 m 34cm である。

〔堆積土〕 7層に分層した。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 遺構の形態から縄文時代のものと考えられる。

第1号溝跡〔SD01〕(図12)

〔位置と確認〕 I R - 72 ~ I U - 78 グリッドに位置する。第VI層上面で検出した。最大幅 1 m 5 cm、確認できた長さは約 37 m、検出面からの深さ 18cm である。

〔堆積土〕 7層に分層した。層中にロームや炭化物を含み人為堆積と考えられる。また、トレンチャーとの関係から、第1~4層は明らかに現代の、第5~7層も耕作地造成の際の盛土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片及び土師器片が出土している。

〔時期〕 詳細な時期は不明である。

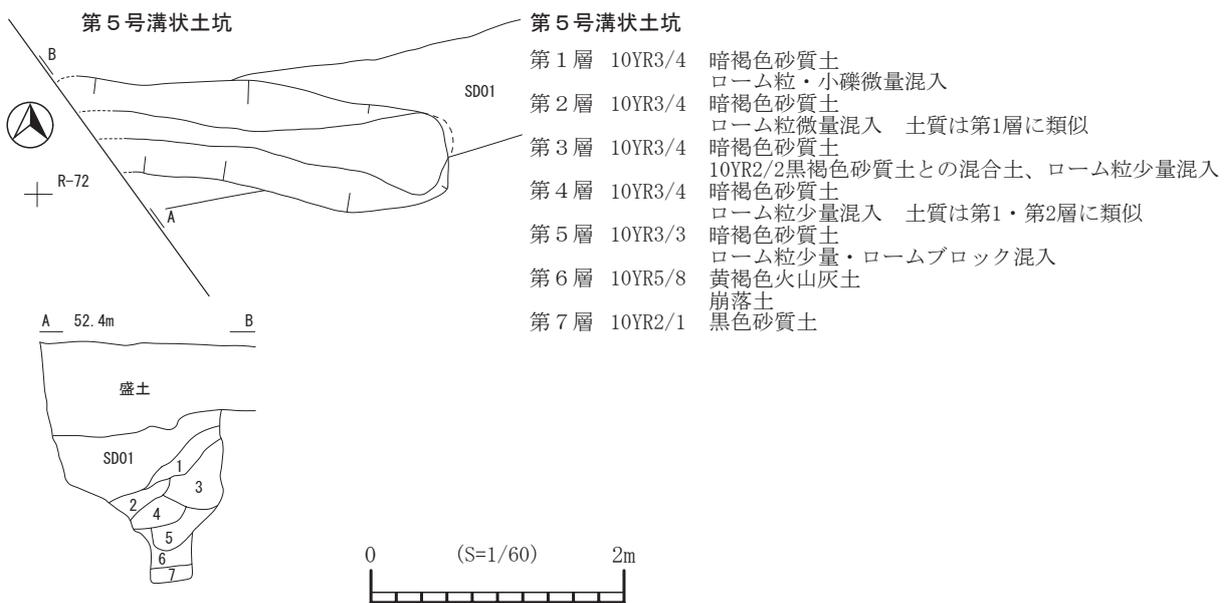
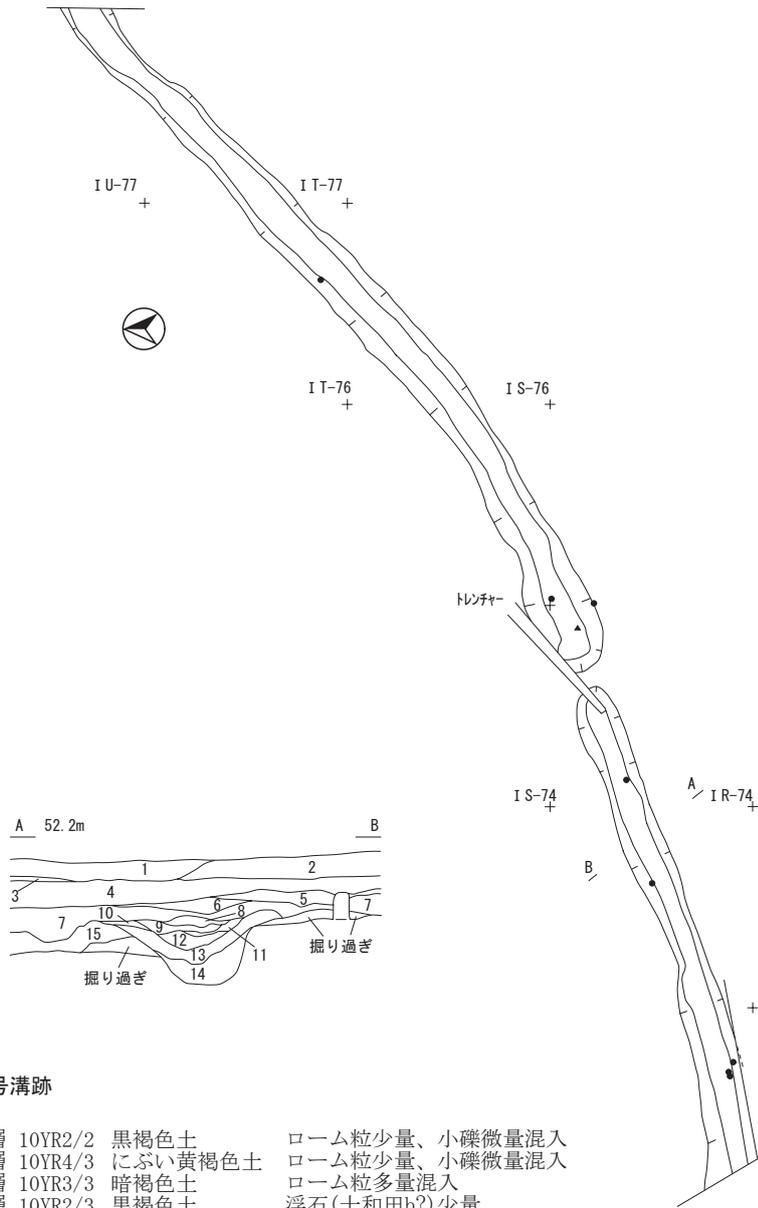


図11 第5号溝状土坑

第1号溝跡



第1号溝跡

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、小礫微量混入
第2層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒少量、小礫微量混入
第3層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒多量混入
第4層	10YR2/3	黒褐色土	浮石(十和田b?)少量、 ローム粒・炭化物・中掘浮石微量混入
第5層	10YR4/4	褐色土	10YR2/3黒褐色土との混合土
第6層	10YR4/6	褐色土	10YR2/1黒色土との混合土
第7層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物微量混入
第8層	10YR4/6	褐色土	10YR2/3黒褐色土との混合土
第9層	10YR4/4	褐色土	ローム主体
第10層	10YR4/6	褐色土	10YR2/3黒褐色土との混合土
第11層	10YR2/3	黒褐色土	10YR4/6褐色土との混合土
第12層	10YR5/8	黄褐色土	10YR2/3黒褐色土多量混入
第13層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物粒・ローム粒微量混入
第14層	10YR5/6	黄褐色土	10YR3/3暗褐色土との混合土
第15層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒微量混入

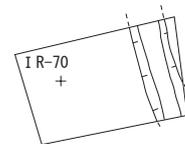
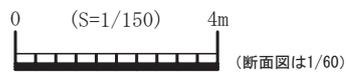


図12 第1号溝跡

第3節 文化財保護課調査区検出遺構

平成13年度に文化財保護課が調査した場所は、平成14年度調査区の隣接地で、平成14年度調査区から13年度調査区に向かって広がる谷部にあたる。検出された遺構は、縄文時代のものと考えられる溝状土坑1基と、時期不明の溝跡1条である。遺物は出土しなかった。以下のその概要を述べる。

第6号溝状土坑〔SV06〕(図14)

〔位置〕 I W-78 グリッドに位置する。

〔規模〕 南側のみ確認であるため、詳細は不明であるが残存する長軸1m、短軸23cm、検出面からの深さ27cmである。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体とする。第1層から上層は、基本土層の流れ込みによる自然堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 第Ⅲ層中から掘り込まれていること、及び遺構の形態から縄文時代のものと考えられる。

第2号溝跡〔SD02〕(図14)

〔位置と確認〕 I Y-76 グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に検出した。西側が調査区域外に延びるため全体形は不明であるが、確認できた長さは約4m20cm、幅約40cm、深さ約30cmである。

〔堆積土〕 2層に分層した。第1層はTo-bと考えられる浮石を含む。第2層は黒色土が層状に堆積する。いずれも自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

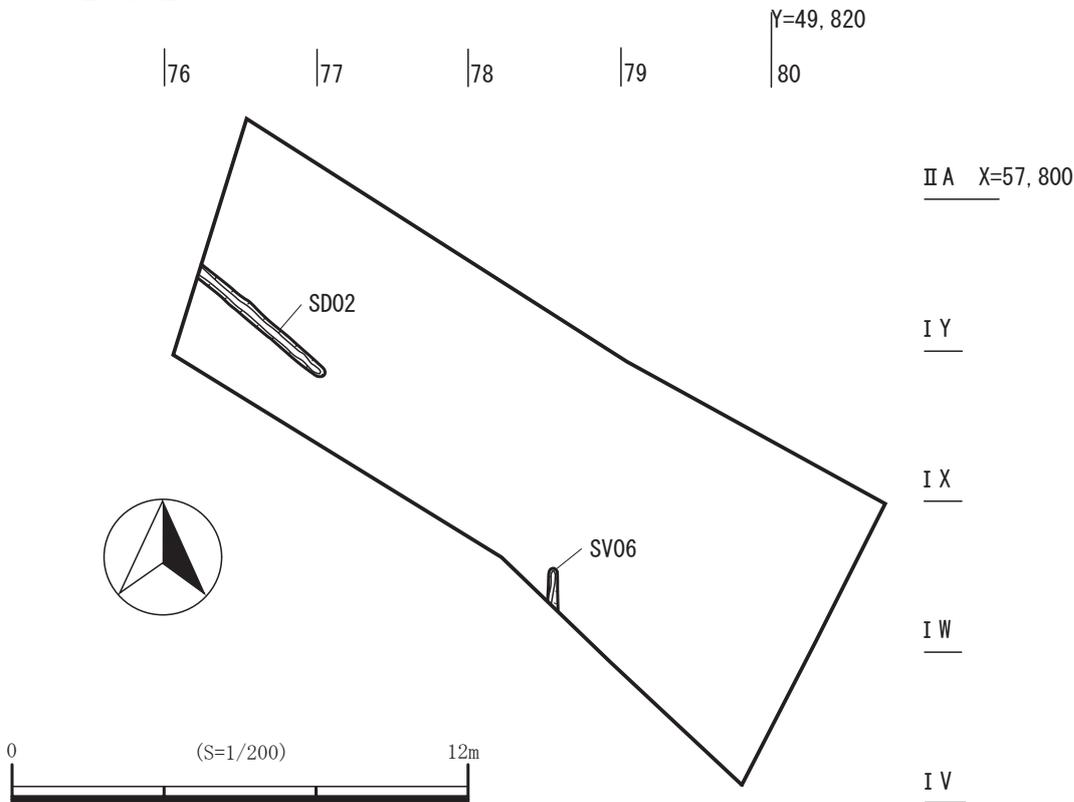


図13 文化財保護課調査区遺構配置図

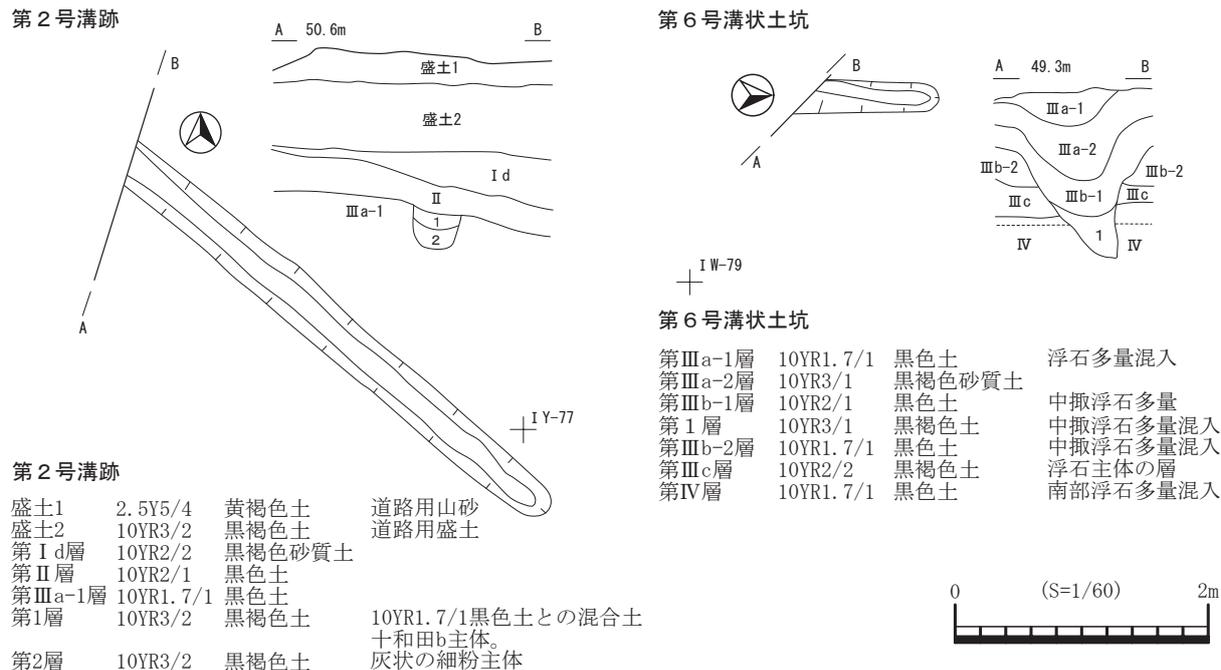


図14 第2号溝跡・第6号溝状土坑

[時期] 詳細な時期は不明である。

(葛城)

第4節 出土遺物

1. 土器

遺構内・遺構外をあわせた出土土器は総数 898 点である。出土層位は耕作土の第 I 層～第 IV 層で、調査区全域に散在しているが、特に II B・II C-79・80 グリッドに古代の土器が集中して出土している。出土土器の時期幅は広く、縄文時代早期～奈良時代までのものがあり、以下のように分類される。土器は細片および小破片が多く、復元され形状が判るものも少ないことから、遺構内出土土器も含めて記述する。

第 I 群—縄文時代早期の土器

第 V 群—縄文時代中期以降の粗製土器

第 II 群—縄文時代前期の土器

第 VI 群—弥生時代の土器

第 III 群—縄文時代中期の土器

第 VII 群—奈良時代の土師器

第 IV 群—縄文時代後期の土器

第 I 群—縄文時代早期の土器 (図 16 - 18)

1 点出土している。胴部破片で、貝殻腹縁押し引き文施文後に、貝殻殻表圧痕を段状に施文している。寺ノ沢・吹切沢式の範疇で捉えられるものである。

第 II 群—縄文時代前期の土器 (図 16 - 19 ~ 21)

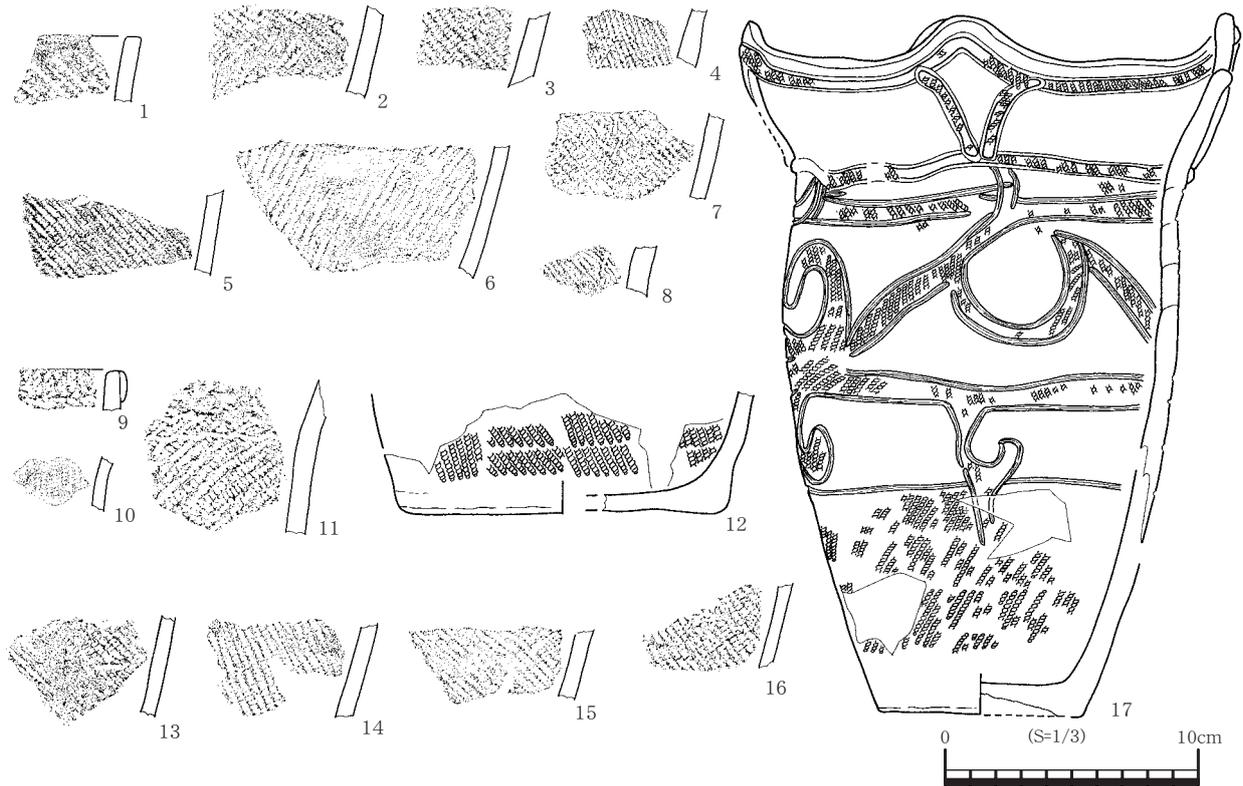


図15 遺構内出土縄文土器

19は口縁部破片で、組縄LRLが横位に施文される。20は0段多条LRが施文されている。21は底部近くの破片で、LRが交差施文されている。いずれも胎土中に繊維を含むが、焼成はよく硬質である。型式は特定されないが前期初頭に比定される。

第Ⅲ群—縄文時代中期の土器（図15—9・11、図16—22～29）

9と11は第8号土坑出土で、9は隆帯貼り付けの口縁部で、縄の側面圧痕が施されている。11はLR施文後に2条の横位結節回転文が施されている。22～26は同一個体と思われる。頸部から外反する波状口縁で、波頂部はひろい切り込みが入られている。頸部および波頂部から垂下する隆帯には縄の側面圧痕が施されているほか、口縁部文様帯内にも、横位および鋸歯状に側面圧痕が施されている。胴部にはRLRが施文されている。27は頸部破片で、細い隆帯が貼り付けられている。29は口唇に側面圧痕が、胴部にはRLRが施文されている。いずれも円筒上層a式に比定されるもので、内面は光沢がみられるほど丁寧に磨かれている。

第Ⅳ群—縄文時代後期の土器（図15—17・図16—30・35・36）

17はⅡD—78グリッドで検出された埋設土器である。四波状口縁の深鉢形土器で、口唇と頸部には横位の隆帯が、口縁波頂部にはV字状とS字状の隆帯が対に貼り付けられ、口縁部文様帯を区画している。隆帯上には、RLが施文されている。また、頸部隆帯の下に横位2条の沈線、胴部下半にも沈線が施され胴部文様帯を区画している。胴部の上半は沈線による三角形および渦巻き状の文様で構成され、沈線内にはRLが充填施文されているほか、下半にもRLが施文される。内面は口縁部が横位、胴部が縦位に磨かれており、一部に輪積みの痕跡が残る。後期初頭の牛ヶ沢式ないしは沖附式に



图 16 遺構外出土縄文土器

相当する。

30は肥厚した口縁でLRが羽状に施文され、直下には沈線と無文帯がみられる。35は鋸歯状の、36は横位3条の沈線が施されている。

第V群—縄文時代中期以降の粗製土器（図15—1～8・10・12～16、図16—31～34・37～51）

縄文だけの施文で、胎土や調整からも型式および時期を特定できないものを一括した。LRとRLが施文され、前者が多い。1～8は第6号土坑出土である。1の口唇上端は平らに面取りされている。8の小破片はLR施文後に縦位の結節回転が施されている。10は第8号土坑出土で、細かい縦走縄文が施文されており、弥生土器の可能性もある。12は第1号溝跡と第5号溝状土坑出土土器が接合した底部である。胎土には石英粒が多量に混ぜられており、胴部にはRLが施文されているほか、底面外側には網代痕が付いている。13～15は第1号溝跡出土、16は第2号溝跡出土である。

31は小型で薄手の土器で、口唇上端を平坦に成形している。32は口唇の破損した部分にわずかに結節回転文がみられる。33と34は同一個体である。口縁部と胴部を意識したものか明確にできないが、浅い沈線が施されている。37は沈線の箇所破損しており、0段多条LRが施文されている。38は単軸絡条体第5類が施文される。40はRLとLRが羽状に施文されている。47は小型土器の底部で、外面は丁寧に磨かれている。48は無文で、内面には粘土を積み上げた際の段が明瞭に残っている。51の底面外側には、木葉痕が重複して残っている。

（小田川）

第VI群—弥生時代の土器（図17—52～62）

平成14年度調査区内にのみ散在して出土している。関連する遺構は存在しておらず、散在している出土状況であること、八戸市教育委員会調査区においても若干の出土を見ていることから、尾根上に何らかの活動域が存在していたものと思われる。全て小片での出土で、接合関係も確認できなかった。52、53は口縁部分で、口唇部に棒状工具による刻みが施されている。54～61は深鉢の胴部破片であるが、いずれも小片であるため詳細は不明である。地文は細かい単節LR、RLが多い。62は柱状の体部を持ち、緩やかなカーブを持った端部は荒いナデ調整が施される。器面には縄文施文され、

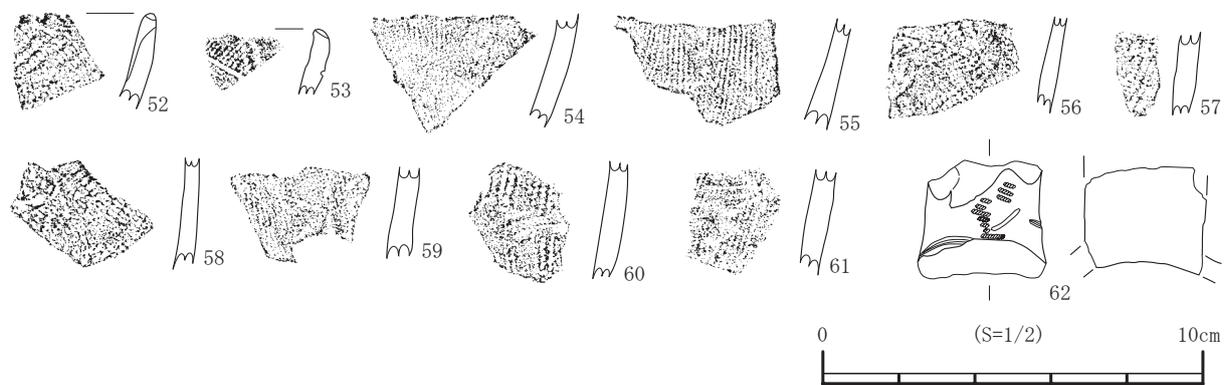


図17 弥生土器

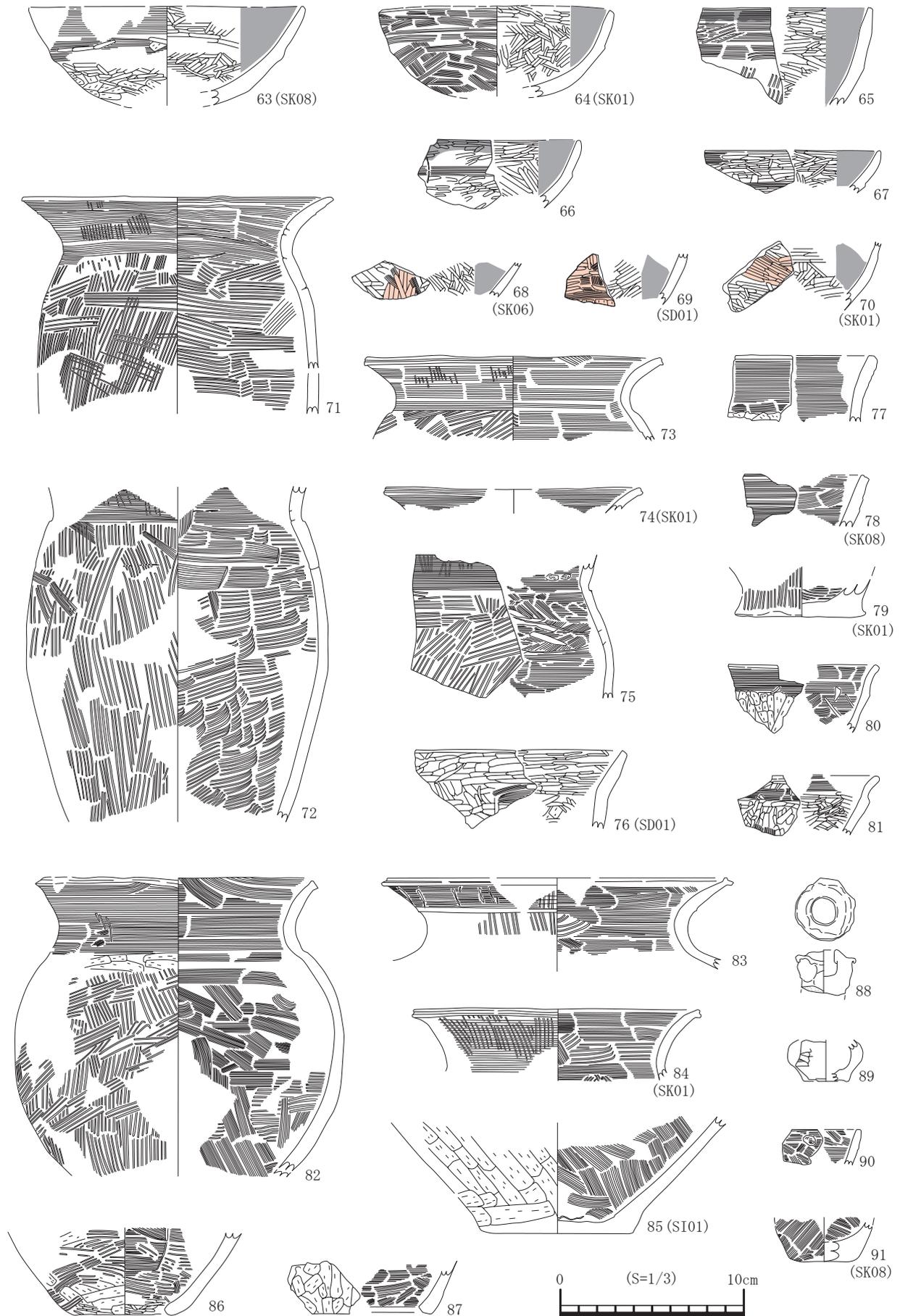


图 18 奈良時代土師器

一部沈線が確認できる。詳細な年代は明らかにし得ないが、八戸市教育委員会調査区では中期の土器片が出土しており、諸特徴も考慮し、中期後葉から後期に位置づけられると考えられる。

第VII群一奈良時代の土器（図18－63～91）

出土点数が少なく、さらに復元個体も少なかったため、遺構内、外とも器種毎にまとめて報告する。63～67は土師器坏である。いずれも内面を黒色処理しており、体部外面中位に段あるいは稜を持ち、口縁部はやや内湾する。63、64は丸底になるものと思われる。65は器高のある器形になるものと思われる。逆に67は器高が浅く、平底になる可能性がある。68～70は土師器坏胴部である。内面は黒色処理、外面は部分的に赤彩され、内外面ともヘラミガキ調整が施される。いずれも小片であるため器形等は不明である。赤彩された土師器は、周辺地域では楯館遺跡、田面木平(1)遺跡等で出土しているが、出土数はいずれも少ない。71～79は長胴甕である。71～74は口縁部が強く外反し、口唇端部に平坦面を持つ。78は口縁部外面に段を有する。75は内外面ともヘラミガキ調整が施されている。80、81は小型の鉢と思われる。口縁部は強く外反し、体部に稜を持つ。器面調整はいずれも異なる。82～85は球胴甕である。口唇部は沈線状に窪む。口縁部はナデ調整であるが、若干胴部調整に用いられたハケメ調整が縦方向に入る。85は胴部下半から底部にかけて残存しているが、外面調整はヘラケズリとなっている。86、87は甑である。いずれも無底式で、両者で器面調整が異なる。88～91はミニチュア土器と思われる。88は中央に指で穴が開けられたような状況になっており、作りは非常に粗雑である。91は全面摩滅が激しく、調整も異なる可能性がある。

隣接する八戸市教育委員会調査区から出土した土器も点数が少ないが、坏は平底になり、甕の外面調整はヘラケズリが主体となっている。これらの年代は8世紀前葉とされている。また、境沢頭遺跡では甕の外面調整はハケメが主体で、坏は胴部外面がヘラミガキ主体である点では当遺跡出土土器と類似点が多い。これらは8世紀中葉を含む8世紀前半に位置付けられている。周辺遺跡の出土資料との比較からも、8世紀前半を主体とした時期と思われる。

(浅田)

2. 石器

出土した石器類は、剥片石器及び剥片10点、礫石器3点である。点数が少ないことから、遺構内と遺構外出土のものをまとめて記述する。

石鏃(図19－1)1点出土している。裏面に第一次剥離面を残すもので、全体形は二等辺三角形に整えられている。基部は破損している。

楔形石器(図19－2)1点出土している。3cmほどの珪質頁岩が素材で、両極技法により割られている。上下両端のエッジに潰れがみられないことから、未使用ないしは破砕片と思われる。

使用剥片(図19－3・4)剥片10点中、図示した2点は剥片下部が折り取られ四角形状に整えられている。3は側縁に微細な剥離がみられる。他の図示しない剥片の大きさは約2～7cmで、形状は不定形である。打瘤の残るものもあるが、破砕片が多い。

磨り石(図19－5・7)5は器表面が摩滅している。被熱により破砕したものである。7は断面長方形の短冊形の礫で、平坦な一側縁は器表面とは異なる光沢をもつ。

台石(図19－6)破損品である。器体の一面だけが磨耗している。

(小田川)

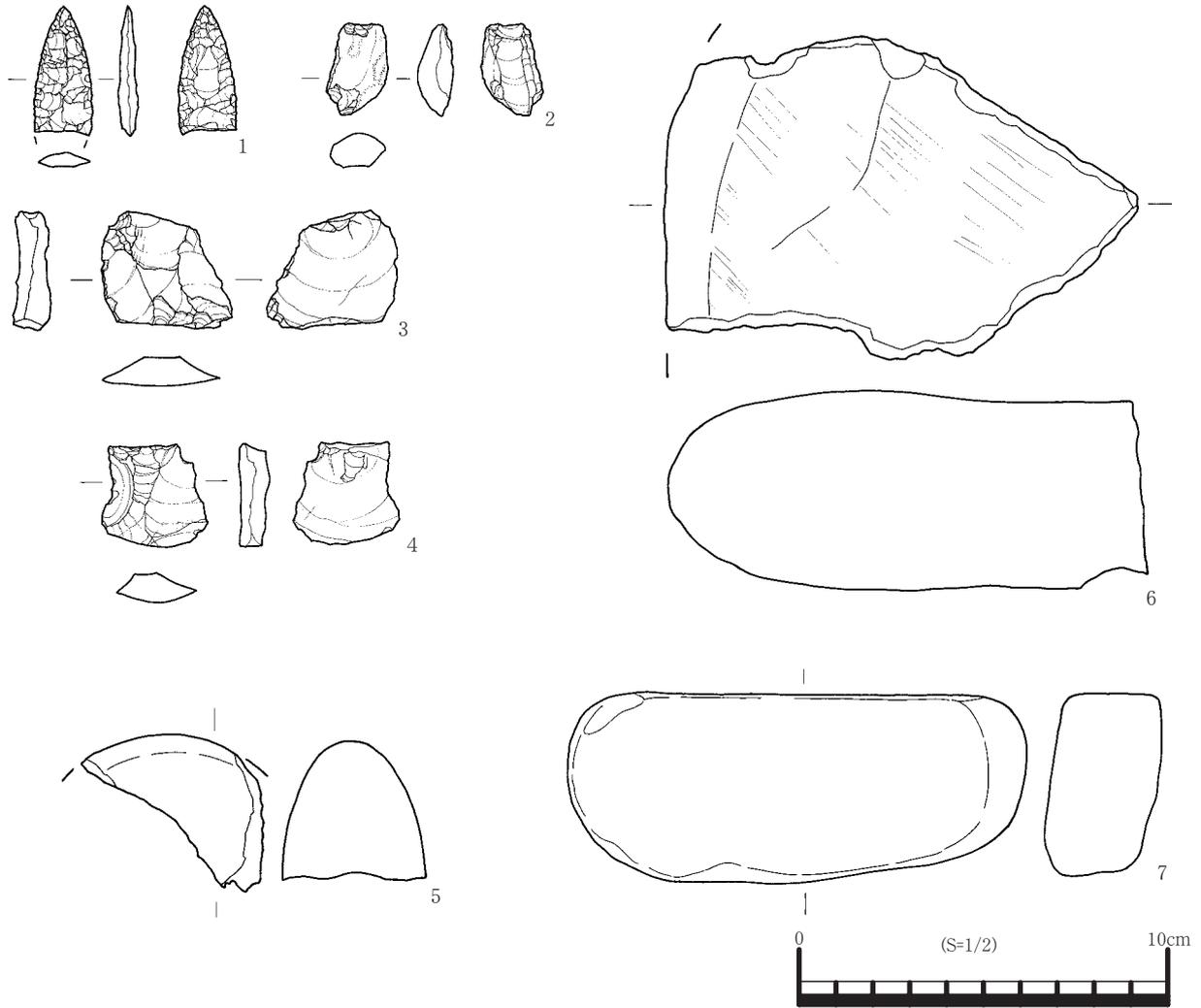


図 19 縄文時代石器

3. 土製品

奈良時代の所産と思われる玉が5点出土している。いずれも平成13年度調査区包含層からの出土である。

勾玉（図20-1・2）若干大きさに差があるが、ほぼ同一形態となっている。

丸玉（図20-3～5）3が他に比べて一回り大きい。作りはほぼ同一である。

泥人形（図21-2）近世以降の所産と思われる。成型時の合わせ目が側面で観察できる。欠損が激しく詳細は不明である。

（浅田）

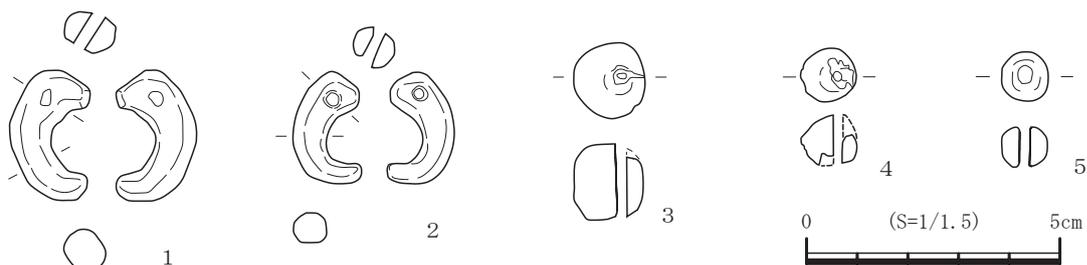


図 20 奈良時代土製品

4. 金属製品 (図 21 - 1)

1は近世の柄鏡と考えられる。全体の約1/4程度の残存状態である。中央には丸に三階菱文が施され、周囲には海波が表現されている。非常に薄く、江戸時代中期以降に踏み返し法によって製作されたものと考えられる。

(葛城)

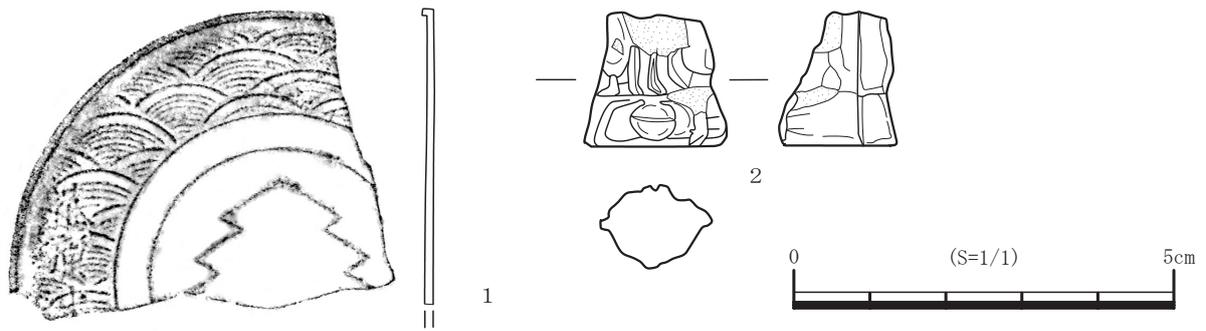


図 21 近世以降の遺物

第4章 まとめ

平成13・14年度の2ヶ年にわたる調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑7基、井戸跡1基、溝状土坑6基、土器埋設遺構1基、溝跡2条である。

調査区北側斜面を中心に検出された溝状土坑は、詳細な時期は不明であるが、おおむね縄文時代のものと考えられる。従って、縄文時代には主に狩猟場として利用されていたことが考えられる。出土遺物は早期から後期まで出土しており、中心となる時期は中期、後期である。土器埋設遺構が1基検出されており、出土土器の時期は後期初頭であることから、この時期を中心に縄文時代の幅広い時期幅で、何らかの活動が行われていたものと思われる。

弥生時代の遺物は土器のみであるが、八戸市教育委員会調査区においても出土しており、少ないながらも当時の活動の痕跡が見受けられる。

また、奈良時代の遺構として竪穴住居跡が1軒検出されている。当初、平成14年度調査区の南側平坦面に居住域が広がるものと考えていたが、調査の結果耕作地造成のためにすでに削平されていたことが判明した。しかし、平成11年度に、八戸市教育委員会によって調査された、本調査区の東側に位置する同一丘陵の南側斜面からは奈良時代の竪穴住居跡が2軒検出されている。また、文化財保護課で平成15年に調査した本調査区東側にほぼ隣接する地点からも、奈良時代の竪穴住居跡が1軒検出されている。これらは全て同一丘陵上に位置することから、奈良時代には本遺跡を含めて、居住域として利用されていたと考えられる。出土土器の年代から考えると、かなり短期間に集落の構築から廃絶まで行われていたものと思われる。

また、同じ尾根筋の先端部に林ノ前遺跡が存在する。林ノ前遺跡は平安時代後半を主体とする大規模な集落跡である。直線距離にして500m程の距離に位置しているが、当遺跡からは平安時代の遺構、遺物は全く検出されなかった。同じ浅水川左岸の段丘上に立地している境沢遺跡では奈良時代と平安時代の竪穴住居跡が検出されている。当遺跡周辺に関しては、時代毎に土地利用の形態が異なっていたものと考えられる。

遺物では縄文時代早期から後期までの土器、弥生時代中期から後期にかけての土器、奈良時代の土師器、土玉・土製勾玉などの土製品、近世以降のものと考えられる銅鏡、泥人形、そして石器では石鏃、台石など、合わせて段ボール箱で13箱分出土している。しかしこれらのほとんどが遺構外からの出土であり、明確に遺構に伴うものは少ない。奈良時代の土師器の中に赤彩された坏が出土するなど希少な遺物の出土も見られたが、遺存状況は良好なものが少なく、得られた情報は少なかった。

平成13年度調査区では東側が県道敷設のため、平成14年度調査区では耕作地造成のため、それぞれ大規模な攪乱及び削平を受けていた。このため、2ヶ年にわたる調査を行いつつも、本遺跡の全体像に関しては不明な点が多い。隣接する遺跡の調査成果を含め総合的に考えると、当遺跡周辺の土地利用の一端が明らかとなったが、今後さらなる実態解明に、発掘調査を含めた資料の増加を待ちたい。

(葛城)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1999 『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
- 青森県教育委員会 2003 『櫛館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第342集
- 八戸市教育委員会 1989 『毛合清水(1)・(2)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 八戸市教育委員会 1994 『夏間木(1)遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第56集
- 八戸市教育委員会 1994 『上七崎遺跡・蛇ヶ沢遺跡・上蛇沢(2)遺跡』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第62集
- 八戸市教育委員会 1996 『境沢頭遺跡ほか』八戸市埋蔵文化財調査報告書第72集
- 八戸市教育委員会 1999 『東北縦貫自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ－昼場遺跡・根岸山添遺跡－』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第78集
- 八戸市教育委員会 2000 『人首沢遺跡・毛合清水(3)遺跡・大仏遺跡』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第84集
- 八戸市教育委員会 2001 『市内遺跡発掘調査報告書13』八戸市埋蔵文化財調査報告書第87集
- 八戸市教育委員会 2002 『酒美平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第88集
- 八戸市教育委員会 2002 『盲堤沢(3)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第92集
- 八戸市教育委員会 2003 『市内遺跡発掘調査報告書16』八戸市埋蔵文化財調査報告書第96集
- 八戸市教育委員会 2003 『大仏遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第98集

遺構観察表

図	遺構名	遺構記号	検出グリッド	検出層位	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	堆積土	備考
6	第1号竪穴住居跡	S I 0 1	II D - 74・75	VI層	不明	1.93	1.60	0.18	3	
6	第1号土坑	S K 0 1	II A - 80	II層	円形?	0.73	0.63	0.24	6	
10	第2号土坑	S K 0 2	I U - 73	VI層	楕円形	1.65	1.12	0.24	2	
10	第3号土坑	S K 0 3	I S - 75	VI層	円形	0.74	0.74	0.07	1	
10	第4号土坑	S K 0 4	I Y - 73	III b層	円形	0.84	0.84	0.16	1	
10	第5号土坑	S K 0 5	I R - 72	VI層	円形	0.84	0.40	0.20	2	
10	第6号土坑	S K 0 6	I R - 72	VI層	円形	1.26	1.15	(2.70)	-	井戸跡
10	第7号土坑	S K 0 7	I R - 72	VI層	楕円形	2.45	1.30	0.71	2	
10	第8号土坑	S K 0 8	I R - 72	VI層	楕円形	2.70	1.75	0.65	8	
7	第1号溝状土坑	S V 0 1	II A - 80	III b層	-	2.65	(0.24)	1.22	26	
7	第2号溝状土坑	S V 0 2	II A - 91	VI層	-	3.74	0.39	1.01	14	
8	第3号溝状土坑	S V 0 3	II D・E - 88	VI層	-	(2.98)	0.37	1.31	12	
8	第4号溝状土坑	S V 0 4	II D - 86	VI層	-	3.49	0.44	1.27	14	
11	第5号溝状土坑	S V 0 5	I R - 72	VI層	-	(2.84)	0.84	1.34	7	
14	第6号溝状土坑	S V 0 6	I W - 78	III層	-	(1.00)	0.23	0.27	1	
6	第1号埋設土器	S R 0 1	II D - 78	III b層	-	-	-	-	1	
12	第1号溝跡	S D 0 1	I R - 72ほか	VI層	-	37.0	1.05	0.18	15	
14	第2号溝跡	S D 0 2	I Y - 76	III層	-	(4.20)	0.40	0.30	2	

遺構内出土縄文土器観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	部位	文様	胎土	分類	備考
15	1	S K 0 6	覆土	深鉢形	口縁部	L R (縦)	砂粒	V群	
15	2	S K 0 6	覆土	深鉢形	胴部	L R (縦・横) 羽状縄文	砂粒・針状物	V群	
15	3	S K 0 6	覆土	深鉢形	胴部	L R (縦)	砂粒	V群	
15	4	S K 0 6	覆土	深鉢形	胴部	R L (横)	砂・石英粒・酸化鉄	V群	
15	5	S K 0 6	覆土	深鉢形	胴部	R L (横)	砂粒・石英粒	V群	
15	6	S K 0 6	覆土	深鉢形	胴部	R L (縦)	砂・針状物・中散浮石	V群	
15	7	S K 0 6	覆土	深鉢形	胴部	L R (縦)・結節回転	砂粒・石英粒	V群	
15	8	S K 0 6	覆土	深鉢形	胴部	L R (縦)・結節回転	砂粒・酸化鉄	V群	
15	9	S K 0 8	1層	深鉢形	口縁部	隆帯・L R (押圧)	砂粒・針状物	III群	
15	10	S K 0 8	6層	深鉢形	胴部	R L (斜)	砂粒・針状物	V群	
15	11	S K 0 8	3層	深鉢形	胴部	L R (横)・結節回転2条	砂・針状物・中散浮石	III群	
15	12	S D 0 1・S V 0 5	覆土・検出面	深鉢形	底部	R L (横)	砂粒・石英粒多	V群	外面網代痕
15	13	S D 0 1	覆土	深鉢形	胴部	R L (横)	砂粒・石英粒	V群	
15	14	S D 0 1	検出面	深鉢形	胴部	R L (横)	砂粒	V群	
15	15	S D 0 1	覆土	深鉢形	胴部	L R (縦)	砂粒・石英粒	V群	
15	16	S D 0 2	検出面	深鉢形	胴部	R L (横)	砂粒・石英粒	V群	
15	17	S R 0 1	III層	深鉢形	略完形	波状口縁・隆帯・三角形・渦巻文・R L	砂粒・石英粒	IV群	器高30cm・口径19cm・底径(8)cm

遺構外出土縄文土器観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	部位	文様	胎土	分類	備考
16	18	II C - 78	IV層	深鉢形	胴部	貝殻腹縁押引文・貝殻殻表圧痕	砂粒多	I群	内面磨き・P - 479
16	19	I S - 73	I層	深鉢形	口縁部	組縄L R L (横)	砂粒・繊維	II群	
16	20	III B - 81	III b層	深鉢形	胴部	L R (横)	砂粒・繊維	II群	
16	21	II A - 81	III b層	深鉢形	底部近	L R交差施文	砂粒・繊維	II群	
16	22	I X - 76	III b層	深鉢形	口縁部	隆帯・L R (押圧)・側面圧痕・R L R	砂・中散浮石・酸化鉄	III群	内面磨き
16	23	I W - 76	III b層	深鉢形	口縁部	隆帯・L R (押圧)・側面圧痕・R L R	砂・中散浮石・酸化鉄	III群	内面磨き
16	24	I W - 76	III b層	深鉢形	口縁部	隆帯・L R (押圧)・側面圧痕	砂粒	III群	内面磨き
16	25	I W - 76	III b層	深鉢形	胴部	R L R (縦)	砂粒	III群	
16	26	I W - 76	III b層	深鉢形	胴部	R L R (縦)	砂粒	III群	
16	27	II E - 74	II層	深鉢形	頭部	隆帯・L R	砂粒・酸化鉄	III群	

図	番号	出土位置	層位	器種	部位	文様	胎土	分類	備考
16	28	I S-71	I層	深鉢形	胴部	R L R (斜)	砂粒・石英粒	Ⅲ群	
16	29	II C-80	Ⅲ b層	深鉢形	口縁部	R L R (横)	砂粒・針状物	Ⅲ群	内面磨き・P-466
16	30	II E-78	盛土	深鉢形	口縁部	L R羽状・沈線	砂粒	IV群	
16	31	I V-75	Ⅲ b層	深鉢形	口縁部	R L (横)	砂粒・繊維?	V群	
16	32	I X-77	Ⅲ b層	深鉢形	口縁部	R L (縦)・結節回転	砂粒・石英粒	V群	
16	33	II C-87	Ⅲ b層	深鉢形	口縁部	L R (横)	砂粒	V群	
16	34	Ⅲ C-87	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	L R (横)	砂粒・石英粒・針状物	V群	内面磨き
16	35	不明	I層	深鉢形	胴部	鋸歯状沈線	砂粒・石英粒	IV群	P-225・226
16	36	II B-74	I層	深鉢形	胴部	平行沈線・L (磨り消し)	砂粒多	IV群	
16	37	II D-87	Ⅲ b層	深鉢形	胴部	L R (横)・沈線	砂粒・針状物	V群	
16	38	I X-76	I層	深鉢形	胴部	単軸絡条体第5類	砂粒	V群	
16	39	I X-76	Ⅲ b層	深鉢形	胴部	R L (縦)	砂粒・石英粒多	V群	
16	40	I Y-76	Ⅲ b層	深鉢形	胴部	R L (横)	砂粒	V群	
16	41	II C-87	Ⅲ b層	深鉢形	胴部	L R (横)	砂粒・中取浮石	V群	
16	42	不明	Ⅲ層	深鉢形	胴部	L R (縦)	粗砂	V群	
16	43	I X-75	I層	深鉢形	胴部	L R (縦)	粗砂	V群	
16	44	I R-73	I層	深鉢形	胴部	R L (横)	細砂・針状物	V群	
16	45	II E-81	Ⅲ b層	深鉢形	胴部	L R (縦)	砂粒・石英粒	V群	
16	46	II C・D-87	Ⅲ層	深鉢形	胴部	L R (横)	砂粒・石英粒・針状物	V群	
16	47	不明	Ⅲ層	深鉢形	底部	磨き	砂粒・石英粒・針状物	V群	P-465
16	48	I W-77	II層	深鉢形	胴下半	無文	砂粒・酸化鉄	V群	
16	49	II C-80	Ⅲ b層	深鉢形	底部	L R (横)	砂粒多	V群	
16	50	II C・D-87	II・Ⅲ層	深鉢形	底部	L R (横)	細砂・針状物	V群	
16	51	II B-73	I層	深鉢形	底部	外面木葉痕	砂粒・石英粒	V群	

弥生土器観察表

図	番号	出土地点	層位	器種	部位	外面	内面	胎土	焼成	色調	備考	整理番号
17	52	I V-71	耕作土	鉢	口	LR横	ヨコナデ	細砂	硬質	褐色	口唇棒状工具による刻み、輪積痕	85
17	53	I R-73	耕作土	深鉢	口	LR?・沈線	ヨコナデ	骨針	硬質	褐色	口唇棒状工具による刻み	91
17	54	I S-72	耕作土	深鉢	胴	RL斜	ヨコナデ	石英、骨針、雲母	普通	褐色	底部に近い、下部無文	84
17	55	I R-73	耕作土	深鉢	胴	0段多条斜	ヨコナデ	骨針	普通	褐色		87
17	56	I Y-75	Ⅲ b層	深鉢	胴	LR	ヨコナデ	骨針、石英	硬質	褐色		86
17	57	I S-71	耕作土	深鉢	胴	RL	ヨコナデ	細砂	若干硬質	褐色		92
17	58	I Y-75	Ⅲ b層	深鉢	胴	LR	ヨコナデ	石英、骨針	普通	褐色		89
17	59	I S-73	耕作土	深鉢	胴	RL?	ヨコナデ	精製	普通	白色	器面摩滅	90
17	60	I R-71	耕作土	深鉢	胴	RL	ヨコナデ	骨針、細砂	普通	褐色		93
17	61	II B-74	耕作土	深鉢	胴	RL?	ヨコナデ	骨針	普通	褐色	輪積痕	88
17	62	I S-73	耕作土	高坏?	脚?	ナデ・LR	ナデ	骨針、細砂	硬質	褐色		19

奈良時代土師器観察表

図	番号	出土地点	層位	器種	部位	外面調整	内面調整	胎土	計測値 (cm)				備考	整理番号
									口径	胴径	底径	器高		
18	63	SKO8	4層	坏	口胴	ヨコナデ、ミガキ、ヘラケズリ	ミガキ、黒色処理	砂粒	(15.1)	—	—	—	I S-73・74 と接合	21
18	64	SKO1	1層	坏	口底	ナデ	ミガキ、黒色処理	砂粒	(12.8)	—	—	—	P-3	25
18	65	II B-79 II A-80	I d層	坏	口	ナデ、ハケメ	ミガキ、黒色処理	石英、砂粒	—	—	—	—	器面摩滅 P-207,433	13
18	66	II B-80	I d層	坏	口胴	ミガキ、ナデ	ミガキ、黒色処理	砂粒	—	—	—	—	P-212,312	15
18	67	II B-80	I d層	坏	口	ナデ、ミガキ	ナデ、黒色処理	砂粒	—	—	—	—	P-219	17
18	68	I S-73	耕作土	坏	胴	ミガキ、赤彩	ミガキ、黒色処理	砂粒	—	—	—	—		28
18	69	SKO6	覆土	坏	胴	ミガキ、赤彩	ミガキ、黒色処理	砂粒	—	—	—	—		27
18	70	SDO1	確認面	坏	胴	ミガキ、赤彩	ミガキ、黒色処理	砂粒	—	—	—	—	I R-73 耕作土と接合	26
18	71	SKO1	1層	甕	口胴	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	砂粒	17.0	—	—	—	口縁外面に段形成 P-2,6,7,8,16	2
18	72	II A-80 II B-80 II B-81	I d層	甕	胴	ナデ、ハケメ	ヘラナデ、ハケメ	小礫、石英	—	(16.6)	—	—	P-295,324,326,350,356, 357,359,392,429	6
18	73	II A-80	I d層	甕	口胴	ナデ、ハケメ	ナデ	砂粒	(16.2)	—	—	—	器表面摩滅 P-183	9
18	74	SKO1	1層	甕	口	ナデ	ナデ	砂粒	(14.1)	—	—	—	P-10,15	5
18	75	II B-79	I d層	甕	胴	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	小礫、砂粒	—	—	—	—	器表面摩滅 P-8	14

図	番号	出土地点	層位	器種	部位	外面調整	内面調整	胎土	計測値 (cm)				備考	整理番号
									口径	胴径	底径	器高		
18	76	S D 0 1	底面	鉢?	口	ミガキ、ナデ	ミガキ・ヘラナデ	精製	—	—	—	—	P-5	23
18	77	II C-78	III層	甕	口	ナデ、ケズリ	ナデ	砂粒、石英	—	—	—	—	器面摩滅	77
18	78	S K O 8	2層	甕	口	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒	—	—	—	—	口縁外面に段形成 P-10	24
18	79	S K O 1	1層	甕	底	ハケメ、指ナデ	ハケメ、指ナデ	砂粒	—	—	7.0	—	輪積痕から剥離 P-18	3
18	80	II B-79	I d層	鉢	口胴	ナデ、ケズリ	ナデ	骨針	—	—	—	—	焼成良好 P-9、14、55	18
18	81	II B-79	I d層	鉢	口胴	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	精製	—	—	—	—	焼成良好	16
18	82	II B-79 II B-80 II A-81 II A-81 II B-81	I d層	甕	口胴	ナデ、ハケメ、 ヘラケズリ	ナデ、ハケメ	砂粒	14.5	17.9	—	—	P-23、24、142、209、211、 219、305、306、327、353、 358、360、368、385、386、 401、418、430、431、457、 458	1
18	83	II B-80 II A-80	I d層	甕	口胴	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	小礫・砂粒	18.6	—	—	—	口縁外面に段形成 P-90、91、191、229、454	10
18	84	S K O 1	1層	甕	口	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ナデ	砂粒、骨針	15.8	—	—	—	P-9、12、13	8
18	85	S K O 1	覆土	甕	胴底	ヘラケズリ	ナデ	砂粒、骨針	—	—	8.3	—	P-1、II D-76 II層 底 面ヘラケズリ	7
18	86	II D-82	I d層	甕	胴下	ヘラケズリ、ハ ケメ、ミガキ	ヘラナデ、ハ ケメ、ミガキ	砂粒、石英	—	—	(5.6)	—	孔径 5.1cm P-449、450	4
18	87	I V-77	II層	甕	胴下	ヘラケズリ	ナデ	雲母、骨針	—	—	—	—	焼成良好	22
18	88	II D-82	I d層	小型土器	口?	手捏ね	手捏ね	砂粒	—	—	—	—	孔径 1.3cm	30
18	89	II B-80	I d層	小型土器	胴底	ミガキ	手捏ね	精製	—	(4.2)	—	—	器表面摩滅	29
18	90	II A-80	I d層	小型土器	口	ナデ	ナデ	砂粒	—	—	—	—	P-453	12
18	91	S K O 8	4層	小型土器	口底	ナデ	ナデ	骨針	(5.1)	—	(3.6)	2.4	器面摩滅 P-2	20

石器観察表

図	番号	器種	出土位置	層位	石質	計測値 (mm)			重量 (g)	備考	整理番号
						器長	器幅	器厚			
19	1	石鏃	II E-74	II層	珪質頁岩	(36)	16	6	2.5	基部破損	1
19	2	楔形石器	S D 0 1	覆土	珪質頁岩	25	17	10	4.0		3
19	3	剥片	I X-72	I層	珪質頁岩	33	35	10	9.0	微細剥離	2
19	4	剥片	II A-74	I層	珪質頁岩	28	29	9	6.3		4
19	5	磨石	II D-79	盛土	流紋岩	(49)	(44)	(39)	(66.8)	破損	13
19	6	台石	S D 0 1	覆土	安山岩	(88)	(128)	55	(874.1)	破損	12
19	7	磨石	I X-77	II層	安山岩	125	52	32	356.3		11

土製品観察表

図	番号	出土地点	層位	種別	法量				重量 (g)	備考	整理番号
					長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)			
20	1	II B-79	I d層	勾玉	25	16	9	2	2.0	完形	1
20	2	II B-79	I d層	勾玉	23	13	8	2	1.1	完形	9
20	3	II B-80	I d層	丸玉	16	14	15	2	2.5	完形	7
20	4	II B-80	I d層	丸玉	11	11	10	1	0.7	完形	5
20	5	II B-79	I d層	丸玉	10	10	8	2	0.5	完形	6

近世以降の遺物観察表

図	番号	出土地点	層位	種別	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備考	整理番号
21	1	II D-80	I b層	鏡	(7.0)	(7.0)	0.15	10.3	1/4 残存、銘・藤原光口	鏡
21	2	II D-80	I層	泥人形	20	11	18	3.9	摩滅激しい	3

写 真 图 版



第1号竖穴住居跡土層（北東から）



第1号竖穴住居跡完掘（北東から）



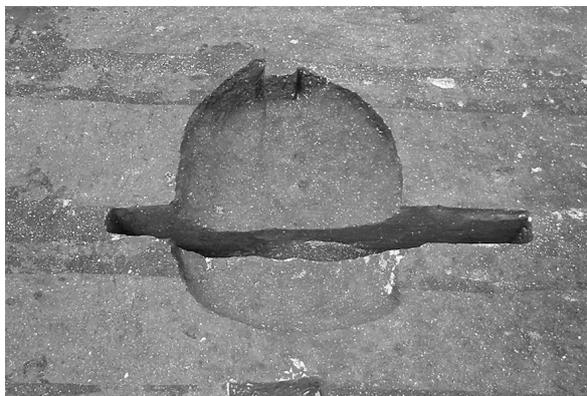
第1号土坑完掘（北東から）



第2号土坑土層（南東から）



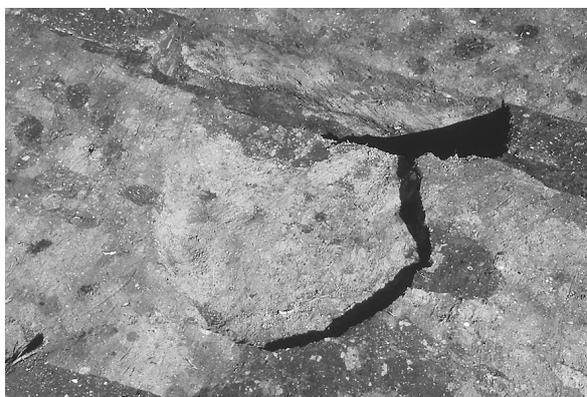
第2号土坑土層（北東から）



第2号土坑完掘（南東から）



第3号土坑土層（南東から）



第3号土坑完掘（北西から）



第4号土坑土層（南から）



第4号土坑完掘（南から）



第5号土坑土層（西南から）



第5号土坑完掘（北から）



第6号土坑完掘（北から）



第7号土坑土層（北東から）



第7号土坑完掘（北から）



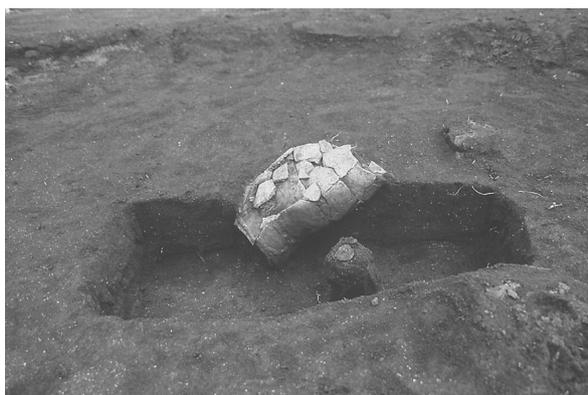
第8号土坑土層（北東から）



第8号土坑土層（南東から）



第8号土坑完掘（東から）



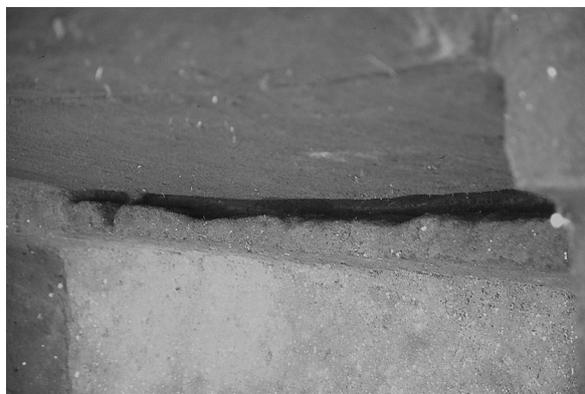
第1号土器埋設遺構側面検出状況（南西から）



第1号土器埋設遺構土層（南から）



第1号溝状土坑土層（北東から）



第1号溝状土坑底面検出状況（北東から）



第2号溝状土坑土層（南から）



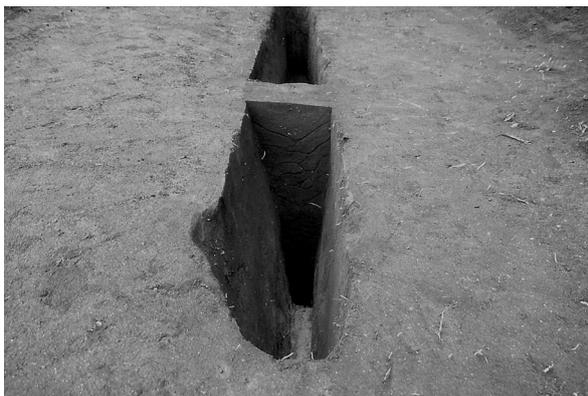
第2号溝状土坑完掘（南から）



第3号溝状土坑土層（南から）



第3号溝状土坑完掘（南から）



第4号溝状土坑土層（東から）



第4号溝状土坑完掘（東から）



第5号溝状土坑土層（東から）



第5号溝状土坑完掘（北西から）



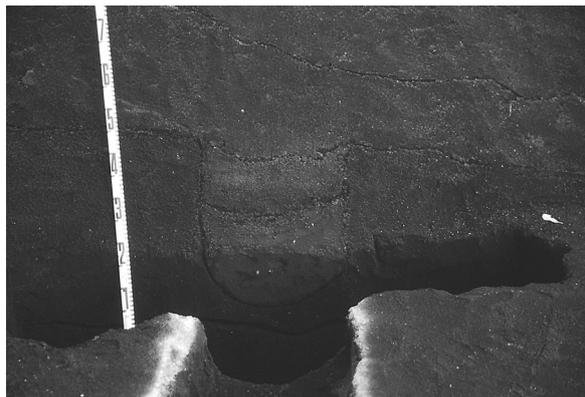
第6号溝状土坑完掘（北東から）



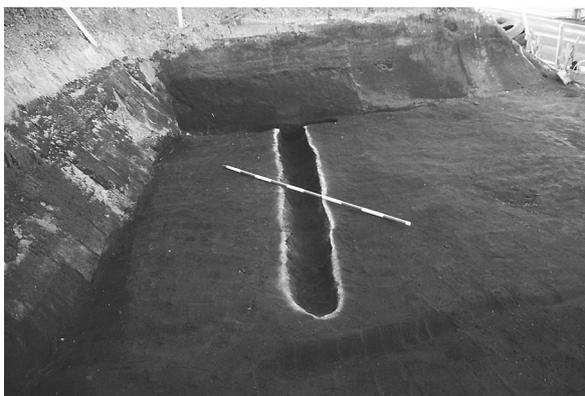
第6号溝状土坑土層（北東から）



第1号溝跡完掘（北東から）



第2号溝跡土層（東から）



第2号溝跡完掘（東から）



基本層序（北西から）



作業風景（西から）



谷頭検出状況（北東から）



調査終了状況（南西から）



15-1



15-2



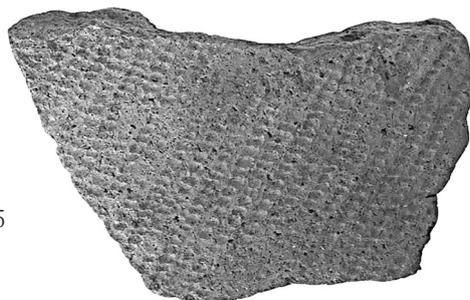
15-3



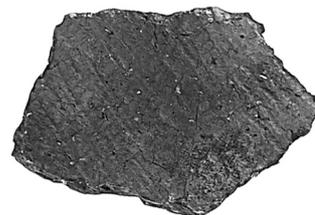
15-4



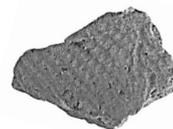
15-5



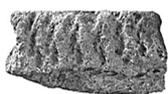
15-6



15-7



15-8



15-9



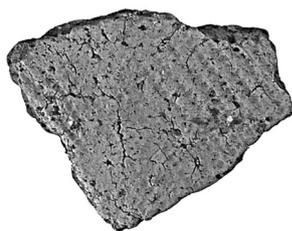
15-11



15-12



15-10



15-13



15-14



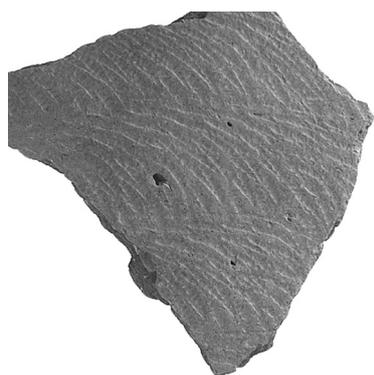
15-15



15-16



15-17



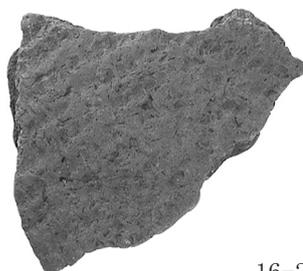
16-18



16-19



16-20



16-21



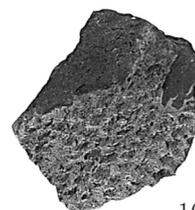
16-24



16-23



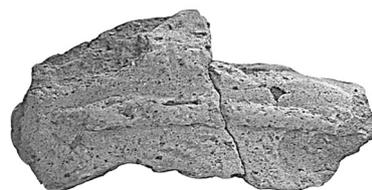
16-22



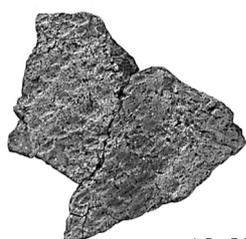
16-25



16-26



16-27



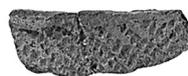
16-28



16-29



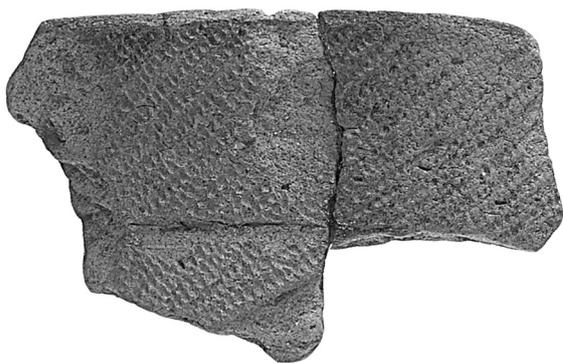
16-30



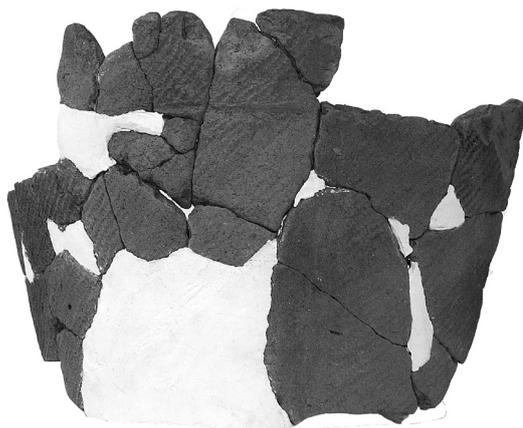
16-31



16-32



16-33



16-34



16-35



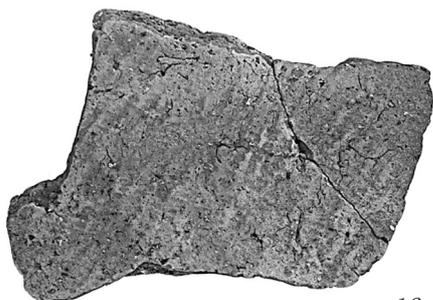
16-36



16-37



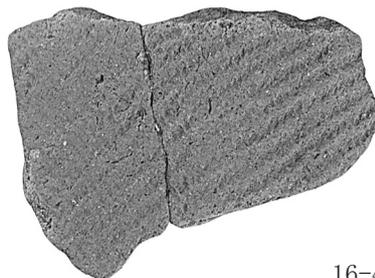
16-38



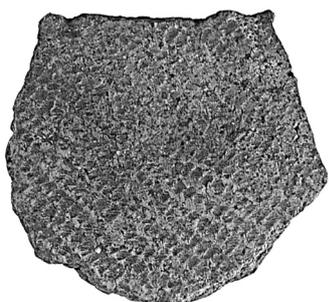
16-39



16-40



16-41



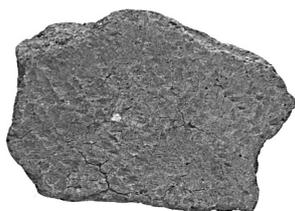
16-42



16-43



16-44



16-45



16-46



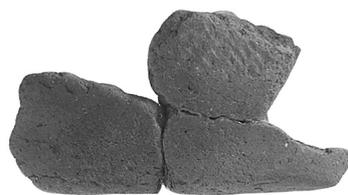
16-47



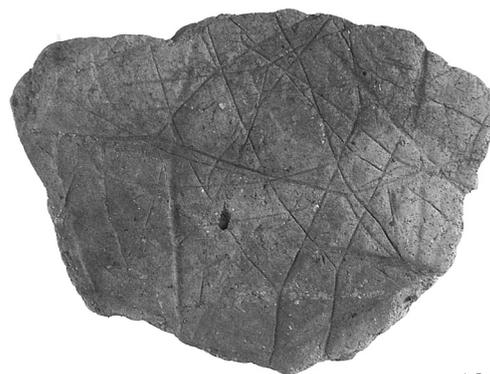
16-48



16-49



16-50



16-51



17-52



17-53



17-54



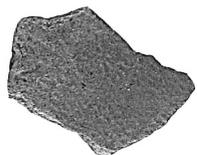
17-55



17-56



17-57



17-58



17-59



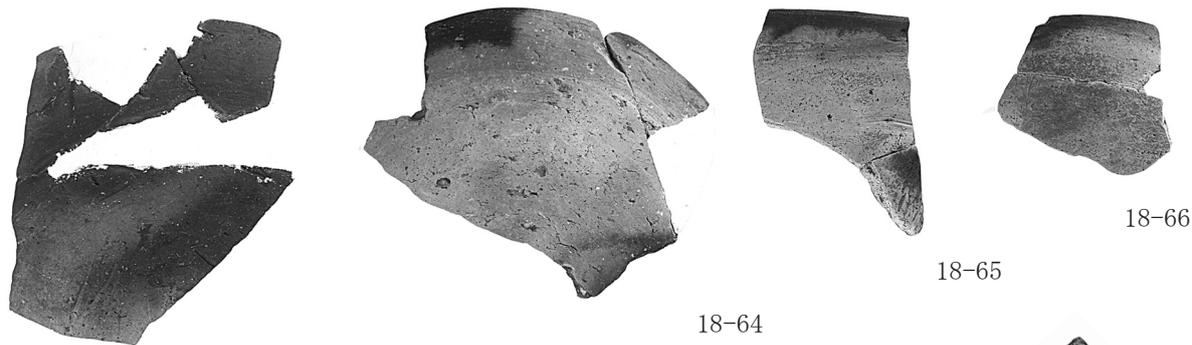
17-60



17-61



17-62

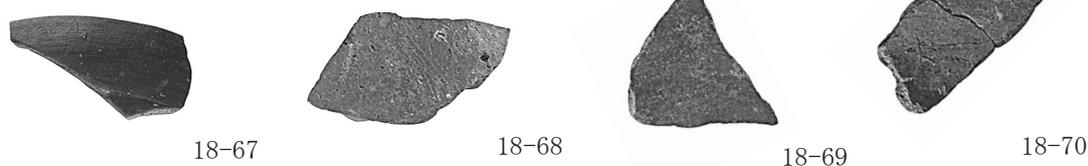


18-63

18-64

18-65

18-66



18-67

18-68

18-69

18-70



18-71

18-73



18-72

18-74

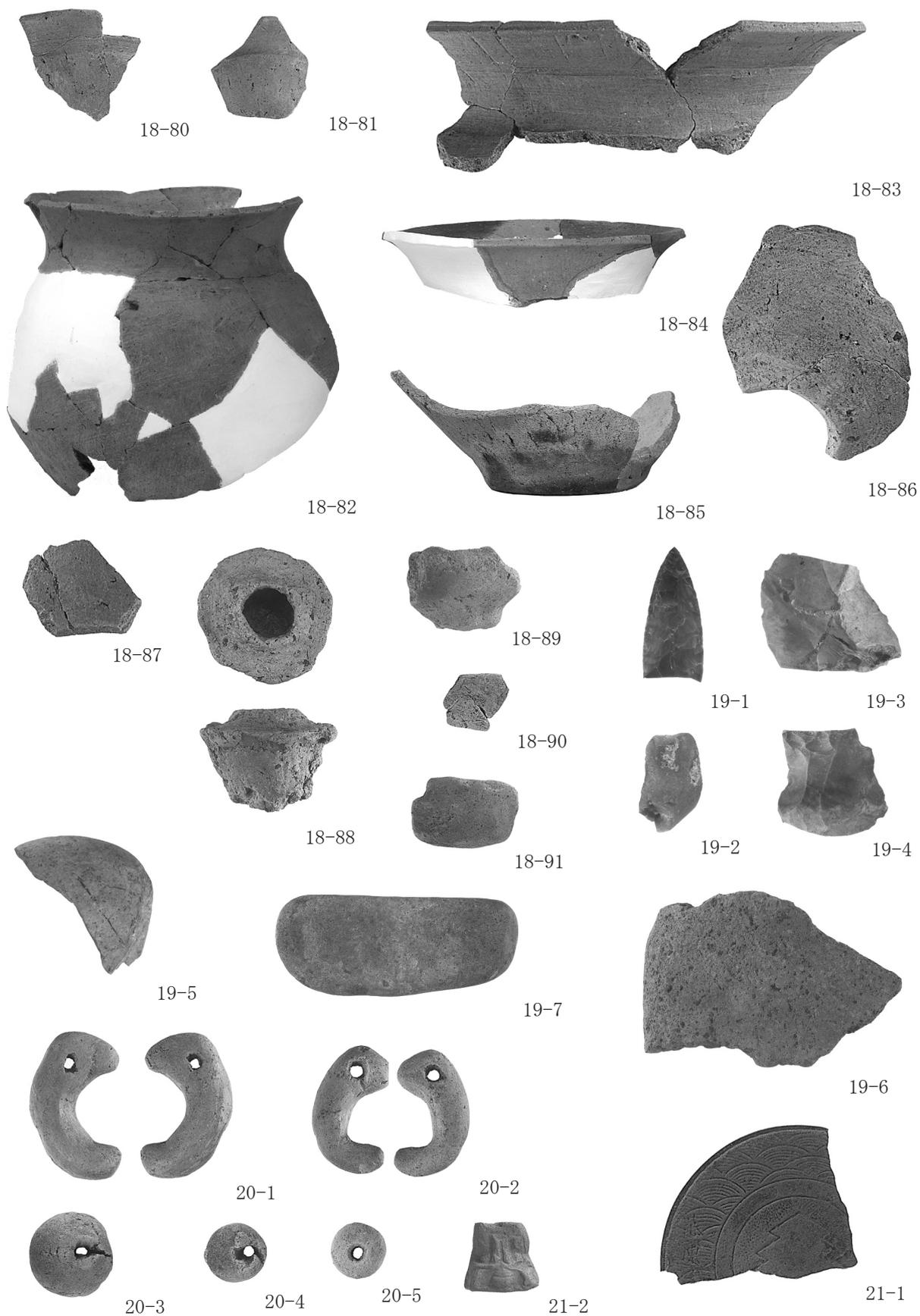
18-75

18-77

18-78

18-76

18-79



写真図版 11

報告書抄録

ふりがな	ねぎしやまぞえいせき									
書名	根岸山添遺跡									
副書名	県道八戸三沢線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告									
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第364集									
編著者名	葛城 和穂・浅田 智晴・小田川 哲彦									
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター									
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内 152-15									
発行機関	青森県教育委員会									
発行年月日	西暦 2004年3月5日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号	北緯	東経					
ねぎしやまぞえいせき 根岸山添遺跡	あおもりけんはちのへしおおあざしりうちまち 青森県八戸市大字尻内町 あざくまのさわ 字熊ノ沢 20 - 6 他	02203	03203	40'	141°	20010419 ～ 20010629	2,400 m ²	県道八戸三沢線道路建設に伴う事前調査		
				31'	25'					
				7"	16"					
				世界測地系 (JGD2000)					20020416 ～ 20020524	1,000 m ²
				40°	141°					
				31'	25'					
				10"	20"					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項				
根岸山添遺跡	狩猟場	縄文時代後期	溝状土坑 6 基 土器埋設遺構 1 基		縄文土器片 (早期～後期) 石鏃・台石・磨石	縄文、奈良時代の複合遺跡。 縄文時代後期初頭の埋設土器を検出。				
	散布地	弥生時代中期～後期	-----		弥生土器片					
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 1 軒 土坑 1 基		土師器・土製玉・勾玉	赤彩土師器が出土。				
	散布地	近世以降	-----		銅鏡・泥人形					
	-----	時期不明	土坑 6 基 井戸跡 1 基 溝跡 2 条		-----					

青森県埋蔵文化財調査報告書第 364 集

根 岸 山 添 遺 跡

— 県道八戸三沢線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2004 年 3 月 5 日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒 038-0042 青森市大字新城字天田内 152-15
Tel. 017-788-5701・5702
印刷 株式会社サンエイ
〒 030-0121 青森市妙見 3-2-19
Tel. 017-738-0040



活彩あおもり